FAIRFIELD GIRLS' SCHOOL

SINGAPORE.

EXERCISE BOOK

18
19

Name

Standard

Subject

Book No. 31

"SINTIT" THE NEW BOOK COMPANY,
Booksellers, Educational Suppliers, Printers and Stationers,
170-172, Cross Street, Singapore.

二千二百三十

一月一日　九〇〇。ラオスの指揮にて宮城遥拝。一七〇〇。郷を憲を
少弱来訪。敬礼式には近野の模範たること。「定」南洋
第七の微候ありと。元〇〇。まし酒して帰る。この日、史、棟、松江より
お風邪郵便来。夜ひやりする田中二郎、田南る田代延男、スマト
ラなる石井健男の三通の年賀状を書く。来信は池内宏、石浜
徒太郎二氏より帰還を祝すとの旨なり。
一月二日　一〇〇。肥下恒夫を訪ね一四〇。明治名にて別る。帰途
「宝庫スマトラ」と史への繪葉書。「宝庫スマトラ」は我がスマト
ラへゆく日、その地い関する唯一冊の日本書として携帯し、いまはメタレ
朝日なる名にある、ぜまるに「宝庫スマトラの全貌」の改訂なり。この日
父より来信
男のるみへう女のるとつひてかの心低ケしとなりし安たよ
風はちれど晴れし朝のもみ祖らのみ墓掃ひてけり年暮るる
家妹、昨年十二月十日結婚、母二日泊きつけしとなり。
一月三日　朝来信三通。一は斉藤茂を兄より帰還を祝し、今後の仕事
を勵まるる旨。一は我が征途、船中親しかりし鉄道者投稿の考を
ぜ紹介を乞ふ。氏が八月[illegible]日[illegible]島へ司令官として赴かれし由。氏の船中描かれ
し書の写真を送れ。（帰還後）（再び）（Dの影見やし所ら）は如何の記念として
来られ掲げあり。義信。相金ふそば敷まかる。他に「文芸春秋」新春号が
ら、大東亜文学者大会の報告あり、松風子解説の「かるれ」と題する詩を
し。[illegible]。午道も速達にて平野義太郎氏より「太平洋」
の昨年及び正月号計十一冊を送はる。この日これを読みて二時まで
眠ることを得ず。
一月四日　一〇〇。起床。元気なし。午道も松井俊治君来訪、一四〇。昨
帰去。好道し堀口太平君来訪、一七〇。昨日去、ちり一氏内保
治君来信。同君は加南にて新聞社会いかがありし昨世話に
なる。

一月五日、熊眠不足のため終日家居。夜大阪中央放送局より電話あり。この日書一、四南氏より連絡あり。

清之助、俣田、ひさの和田幸三郎、愛知県西尾町の山崎仁太郎、及び小倉祝二郎の入隊祝賀書届く。

一月六日　終日家居、書一、航空機多く飛ぶ

一月七日　朝大阪放送局へ朗読用の詩二篇を送る。けふコキトウ会あり。所用ありて欠席し散歩を兼ねて他一家へ書かしむ。来客　堺に在る平氏及び家父来る。家父の歌

戦捷の文字をとなへし書を読みし年のはじめのうたのなつかしさかな

一並びて祖父を祝ふ人の数とはしらず編集のうつ

あいさつといふ文はしつゝ何かしらわれはたいしるたいりうしる

うれしきはかつうすでらしなりはるばる来とか書のおとづれ

一五、三。他ト来り、一七、〇、すの上路四丁松園なるコキトウ会に出よとなり。「ことのかしこ改」の詩演せしみいて断る。神経衰弱（恐怖症）なりと明らかなれば改方なし。

一月八日　終日家居。書陸軍始のための航空機数る。飛ぶ。書一。

〇四、三〇　翌月武氏より隔戦を祝ふ文来る。記を録らる。

一月九日　書一。夕方前井上氏来訪。寒気を冒して

長尾良子来信　石神井の船橋氏知を訪ねし不明。

一月十日　終日家居　松本善海を訪ねんとせしも出勤。帰宅後

一五、〇。白鳥清之来宅。研究所もつくべしと

なり。　夕中御来。いやらし

一月十一日　終日家居。雨。来信　JOBK佐々木氏より

氏より詩五篇を求むるなり。

一月十二日　終日家居。午前中　柏井昇　満洲なる母へ

帰るとて挨拶に来る。王路氏より電話　十六日太平洋協会

一四、三〇　〇会

一月十三日　〔二十三日〕

家庭　一六〇〇以後は休暇にて、今夜一九〇〇より大会館にて沖二百回を演ぜられ、会するもの、彼を送りてゆく。部屋を出るその紅葉、淑石、子規の男らしき話面なりし。

一月十四日　午前　九時起床。午前　九時起床。一六〇〇過ぎまで勉強して帰る。㊐父子訪。夜田代紙男君の父君を遣送、特別待遇にはき十八日以後に決定。

一月十五日　午後山川弘氏来る。㊐赤羽高氏。十八日午前中来初との由、夕遣送平野氏を送る。満鉄の会社にて「現代」を訪問。

一月十六日　久し振りに調査。一、三。大毎へ中を渡る。桐山君瑞穂のかるの会を記す。一四、三。太平洋協会（中を「ロスト」の改称）す。平野義太郎氏来、満鉄田中清次郎氏、幼方氏、大野氏の聯絡係中なり。平の分すみてから八十八の改称の話あり。その時野呂田氏来る。終了後夕飯ついで、野呂、幼方氏とお茶すみて帰る。この日共産党や女史の会あり。㊐田中英雄、杉森孝次氏

一月十七日（日）　来訪者多し。大山正孝、鈴木力二郎。仙頭治郎君、遠藤来、此の新婚式の由。堀口太平君の結婚をおすすめ帰る。山久保氏妻の会を見に帰途を急ぐ。いまの家へ入らんとする。稲子やく最後なる孫ら酒子、お平氏婚式なり。

一月十八日　一六〇〇。女中野口の問いの稲子の新婚式にゆく、ゆくとの新成の人。義足弟の結束履行にしてこれるも面白き新郎の後見人を仰ぎ新宅を訪ず。帰途仙家寄して我の如しとなり。㊐仮入

一月十九日　風邪の為田代氏へ電報をしておくことにする。夜報道部に不足之中氏のうわさ講演をまく。愛媛。㊐天山之宮司来

一月二十日　午後肥下を訪れ、連れ帰る。なお風邪やゝ良し。㊐なし。

一月二十一日　朝平野氏を送る電報、同井来り書、話会して話す。

日比谷山水楼の満会に会いゆく。あか抜け会なり。東郷元帥、幼方、
加藤氏の外信夫淳三郎氏、松本、川久保。すべて三人ずつ出席
みな別る。けの父のつ手紙

一月三十日、朝より「好逑伝」（伝奇春史記）を読む。夜堀山勇三君来る。
風邪なおる、胃病癒もまた大分良し。㊐なし「J.O.B.K」へ断り
一月三十三日。午前中、中尾文吉氏、八千代、書も奥の階段を掃く。
延記帳みな、一五、三。浦和市役所一一三八の田代暁一郎氏を訪
問、改男の延男君のを怒し、一七、〇。結婚届去。㊐谷山新之輔、中
尾夫妻。

一月三十四日（日）一五、〇。改郎氏家族来り、夕食後引き出を開けて帰
る。男は施設の菓子をもらえる。二〇、〇。改郎来り、二二、〇。改
帰る。㊐連盟のうちあけ話を長尾氏の会あるため、明晩の延
延、田中三郎、父、芳雪堂正義　この夜不眠

一月三十五日。一四、〇。紙が来る。長尾の会への断りなり。船越まよ出
発まぢかに延期言ひもしてそれし田㊐吃郎

一月三十六日　統の家居、㊐[illegible]J.O.B.K佐々木茂之助、赤羽高氏
夜筒井来る　㊐赤羽高氏　吃郎へ。

一月三十七日　一〇、〇。松坂治郎を家に訪ねしに、若松松一郎氏を訪ねて
不在、一二、二。肥下を訪ねスマトラんてしを渡す。帰途「史記列伝」三冊
を購ふ。㊐西阪修の展覧会あるため、夜筒井、野上を同伴し来る
佐々木茂之助氏を更訪。

一月三十八日　㊐「新文化」の芸世話しする。じるまーしんぱーしんなりしにて義
男氏来、分ハンピレ近くんの話。一二、二。千葉子二人を連れて来る
一四、〇。伊藤信氏来訪、英国史の会員のパンフレットを移しつて
来る。㊐田来る。赤木仁氏この会、とせい断る。夜㊐赤羽高氏来る
三十日ハン来るとのう

一月
三十九日　統日出家居、書一すむ筒井南京至一蹴を持来る。㊐堀口

大平、伊東静雄㊀伊東静雄

一月三十日　書云、去月尚志来訪。まるさは送して出さる。その書、「路程標」に帰郷として我のことあるを喝う。㊀新文化の討伐

二月三十一日(日)　稲垣来る。明日富士スカートで試合する由。約束す

二月一日　午後曲を多摩川の富士スカートに行く。試合を見て、

二月二日　午後、曲を多摩川の富士スカートに行く。試合を見て、

二月三日　夜、降雪。書一通。昨夜、午前中、執筆。

二月四日　夜、月井来る。この夜不眠。㊀月井と二時伊東静雄宅に

二月五日　書一通。肥下を訪ねんとせしに、路に会う。大雪。報を受

二月六日　朝、君に会う。十日来る時は床の由、之舞に行く。帰りて夜、月

二月七日　井鉾を訪ず。この日、終日、外出。㊀おのれの青春

二月八日　夜、降雪。書一通。昨夜、午前中、執筆。伊東静

二月九日　去に送りしのち、「安愛の歌」を見、初陣

二月十日　を献ず。の速達出す。㊀[illegible]寿田尚志、

二月十一日　アロハ[illegible]

二月十二日　けの来る。多し。[illegible]

二月十三日　久保来り、明日、[illegible]

二月十四日　中に我を連絡とることを約す。日塔[illegible]

二月十五日　けのは肥下を訪ねしめ、[illegible]

二月十六日　[illegible]

二月十七日　[illegible]

二月十八日　[illegible]

二月十九日　[illegible]

二月二十日　[illegible]

二月二十一日　[illegible]

二月二十二日　[illegible]

二月二十三日　[illegible]

二月二十四日　[illegible]

二月二十五日　[illegible]

二月二十六日　[illegible]

二月二十七日　[illegible]

二月二十八日　[illegible]

二月二十九日　[illegible]

二月三十日　[illegible]

二月三十一日　[illegible]

二月八日。八〇〇。塩山駅を出、甲府着、市中見物の後、饗餐を食し、即近
線にて富士着。[illegible]三島[illegible]修善寺行の軌道にのり、途中長岡下車
温泉に宿をおのの安眠。

二月九日（日）けの山久保の父に時間をきいやき羽田の会にて出発しし昨夜不眠
の為床にはいらず。同井を呼びて、共に茶に注ぎ乗車、塩山駅にいたり
安眠す。

二月十日。同井と一〇〇〇。改修寺にいたり移家を定め、そこ引連れての
八〇〇にのる。一時間車かかる。一五〇〇。改同井帰京、我は西下、一八〇〇。
改修にて下車。宿に入る。
二月十一日 浴おわりけるに居るうちに午後天気晴れ教会せし後汽車
に乗る。主ちついけいてたゝ系、途中下車（大郎）風呂浴びなして熱海
二月十二日（紀元二六〇〇）けせ日曜とめて寺詣きしいては故郷に帰りして大
坂寺と出発。八時すぎの汽車にて一二〇〇すぎ大阪着。田辺へゆく
夜まで父帰らず。林知父（咲耶は[illegible]）帰宅）建、大と祝宴。
二月十三日 午前中大阪市内にいたり[illegible]主人宅、帰国の諸取扱を会
しし会同、午後二氏に会へず。午前中にて伊藤を呼出し、立
帰継男君の祝い話し。それより北島西一丁目の[illegible]建男少尉の
家を訪ね、祝父君母君とスイトンを食す。一二〇〇地下鉄戎橋
北にて三家族と会し[illegible]島の新比[illegible]にて飲食。その後南地の
芸妓家にて話せし後帰る。
二月十四日 午前[illegible]〇〇に[illegible]電話せしに立山[illegible]十五日[illegible]
より断るとい池い。午後四時の夫河野参[illegible]夫君と初對面。五
の日祝父の命日にて私宅へ集り着、父は母[illegible]へ[illegible]我と
今夫との縁組とは[illegible]縁なり、夜主婦君のところにて中島、伊藤
二月十五日（日） 田、主婦の五人にて二時大阪の会、林田明を呼びをれし
林知父の祝いの中を同じの話、その後、会同の叔母来る。この夜も不眠
夜、不眠
二月十六日 一〇〇〇 阪和行車する。咲耶の嫁ぎ先東北郎北海道[illegible]

四ヶ月帰宅ゆゆも、一五、三〇。四巳着。（六、〇〇、こゝを立つて文部ゆゆもしし和田を訪ねんず、宅れ西ゆず、大連い下車せし宿不快、泊り急行にて帰京と決め、然夜不眠

二月十六日　七、〇〇。起京着、就宅。午上より一寸を訪して帰宅、書一寝、夜寝　併せて十四時間

二月十七日　一三、〇〇。まづは丁。BKと文学への断り状書きしのみ、肥トを訪わしい渡習として二。谷のお訪のつて来り訪わしい留守、伊藤氏の「婦人倶楽部」講演帰宅、夕食後久保訪わしへ留守、筒井と明伊ゆ谷を就寝して就寝。留守中婦人倶楽部の夫人来訪の由

二月十八日　切上四郎氏（三月三十日）を書くことを婦人倶楽部と約す（一一、〇〇来訪）一三、〇〇。徒歩にて上野神井の「猫塔」を訪ね、留守宅訪問、帰宅　夕飯後肥トを訪問、二一、三〇。同井と銭湯へゆく。ちゃんと墓に「やこ（ゝ）ゝ」伊藤氏に出す「不忘大日記」を送る。

二月十九日　義太、野口、辻、森、芳、芝へ八〇〇。朝ゆゆ和田和下紀之助の二通来信。午後、茶寝へ散歩　伊藤書夫「春の宴」をくれる。娘しと宮村君「蒙古の砂漠」を送り　切入氏を訪ねゆ。帰りゆゆ。切入君は南へゆくと也、ニューギニヤへ出かけて。

二月二十日　一〇、〇〇　来訪者　吉田萬君の父母と話す。海老五十枚をつくる。中央公論の稿を氏を訪わしい留守、毎の外南の前で若松路（中氏）に会ゆ、訪わし相山、稿を敷氏に　ともかくて在、いろいろいやを「接吻」一冊と「掏小説」一冊を拝る。帰宅後伊藤氏に「不忘大日記」を渡す。筒井と銭湯へゆく。

二月二十一日（日）午後　木場園司君来訪、松井俊治君と来訪、大連君とは留南に来る。八〇〇を出せる。

午前中は久保君を訪ね、白鳥氏を伊藤氏と（巳）

午後　白鳥氏を伊訪わせしい婦人倶楽部社長と話せしとて、帰途（巳）教

午前中後巳、藤井君来訪、話を出せるとて。

二月二十三日 周研究所へ出、鈴木朋茂の三君と話す。…工藤(?)…の
「アジア旅(?)」あり。一七・〇〇帰宅、夜、筒井と荻窪へ散歩、入浴
一〇・〇〇 東洋史の中学入学試験予備検査、判定のみB、専任検査で組し
こむ。留守中 池下来り 後(?)内の所へ中きしとらふん(?) 追掛けて 到りしも已に
居らず。六国史二冊を友(?)澤へ返却(?)と取りて帰る。

二月二十四日 書斎すむ。池下来り、全同叙文上宴(?)、学士会館にあることのこととん、訪ねしも不
在。一七・〇〇まで神田を散歩、池下来りて「キルキスタン(?)へ」と郁子(?)又は
「アジア社会経済史」を購ふ。夜(?)と喫茶、食事にて(?)つくしの北濃(?)し。一七・〇〇
宮(?)と会食。二〇・〇〇 池下の宅へ同行、明日小金井の家へ入る由。

二月二十五日 午前中 [illegible] 坂口太平君来訪、午後南アジア研究所へ
中く。「マレー語文法」と「マレー史」と「ラッフルズ図書館書目」とを寄附す。
夜八時より二十四史講読会、松田先生は北アジア研究所への復職(?)話(?)
ります。「南北アジア学報」を贈られ帰る。寒気して アスピリンのみて臥床

二月二十六日 筒井と絵(?)画をかし(?)せんとうらしく食後来る。心書す。西満氏「東亜(?)
紀行(?)記」受贈。佐夫清三郎氏より「ジャワ(?)ん書目」いつも来信。

二月二十七日 伊藤(?)仁(?)の池谷(?)「春の鼓笛」贈らる。午後池下を訪ね、阿佐谷
に散歩。留守中 筒井来り「東邦近世史下巻」を探し来りし由。風邪や、
軽快。東洋の教科書買いにおいて(?)。夕食後 久保来り 明日書斎会(?)におむ(?)村(?)まで

二月盡日 昨夜より眠れず、書斎(?)に招待を受けし久保の許へ行く。富岡(?)の仏蔵院
あたりを逍遥して懐しむ。一四・〇〇帰宅、留守中 渡辺晴(?)彦、三品(?)
我二君来りし由。一五・〇〇 武藤(?)兄来訪。皆来る(?)同く中へ村田(?)帯
筒井も来る。

三月一日 書斎すむ。渡辺晴彦(?)君来る。討(?)論(?)の会を断る。夜筒井来る。「東洋の」す
こ(?)印すの文なつかしく悼(?)ふ。
子(?)贈(?)依頼あり、断る。

二日 書斎、建国(?)会館の席(?)上、日支人(?)治る。会(?)は少(?)、片(?)倉(?)以(?)子(?)比(?)

三日 午後 松田氏(?)来る。筒井と荻窪へ散歩、「東洋史記」購ふ。夜 建(?)来る。

四日　午後肥下を訪ふ。しも留守。十字塔の稲葉健吉君来訪。十日までに「少国民の友」に「三篇の詩」を書くことを約す。二〇〇。昭南より「オ祝言」、田代継男君の声を聞く。けふ「三篇の詩」再読。

五日　堀辰雄氏を午後訪問。発熱とて臥床中なり。佛沢達子と海苔三十枚を贈る。それより中野清兄宅を訪問、その間の来訪を謝す。夜中野君来訪、「山の麓」同人堀田君とやう来合せ、二三、三〇まで共語。

六日　午後、筒井来り芝い教室、阿佐谷の教員、「無名草子」と増補「南方の宝庫」とを借す。

七日　外夜比谷図書館に眠る。朝JOBKより一五〇〇迄附。一三、〇〇迄、中野氏来訪。三日一日は家にて中断の陸迄とのこと。日本刀お帰り芝す。夜山久保来り勢満軍務局の五〇〇届く。

八日　終日外出せず。昭南より迫迫のハガキ。伊藤静雄とスコトラ西海岸州司政官矢野貞三閣下のところ、去年八月末迄ありしウイスキーの礼を云ひ書きつづく。南洋日記字宮鳴く　（メガネ）の句あり。迫かなるかな。

九日　一三、三〇起床、全く夜書一反対となる。丸三日の病気を足無し。来り芝夫氏を訪ねビルを馳走になり、帰宅、筒井と二一〇〇まで話す。「少国民の友」の稲葉君来りし間、夜そのかの「三篇作る。（百日紅）」について「南印弦弦行」流れ環樹若を講ず。

十日　陸迄に会ふ。一四、三〇起床、全く夜書二反対となる。終日家に閉じこもりて無写。

十一日　午後肥下を訪ふ。しも留守。けふ民族学研究所の「西洋弧の弦」（賀岡）「森林の弦」（森岡）を頂く。山の麓社に送付。

十二日　午後南方文化研究所にゆく、一六、三〇。白鳥先生来られる。ついに明実録を明日より毎日之を読みにゆくことにす。帰れば昭南の西沢繁夫君より来信あるかしや。

十三日　南方文化研究所へ一三、〇〇にゆき「明実録」を百百余を読みにす。「五三〇箇

に成功の見通しを新し。一六〇〇過ぎ帰宅、留守中留井来りて明日帰阪とのこと
し由。けふ佐藤委夫「大亜細亜建設」を借す。面白かるべし。夕飯牛
鍋、珍しと云ふべし。

十四日(日)九、三〇起床、睡眠不足にも悩まれり。一九〇〇。肥下を訪ねしにコキト三月ゴ出来
しなれり。けふ文子来信、建北を講習所の第一班に合格、十八日再上京と
の由。けふは十二月世一日付を以て徴用解除来る。
十五日 午後調髪、池袋まいの定期券を買ひ研究所へゆく。来信 四南の古
田篤君、及び元大吉の姉お部マネーヤー細川家平より。夜コキト四
月号うんぬ話と文章を書く。
十六日 午後研究所へゆく 帰途学生時代に言はれる姉氏を訪ねしに会へず、来
信、山口治研究。
十七日 午後研究所、白鳥先生来られ「宇宙について」お話す。帰宅すれば建来り
居る。来る池袋の英女来信 スマトラの見い「移民」記事おもしろし。
十八日(月)〇研究所へゆく、一七〇〇帰宅、スマトラの「蕃族二少」射ず来信、夜古田篤
君と文貞氏とへ返信、「文芸世紀」二十八号まいい話一篇とのこと、「文芸文化」の
田氏へ歌五首送る。のるかのうめの色とのこと。夕田芳敏「ペンペン」講ず。
十九日 昨夜不眠のため研究所休む。書、近くの公園にて鶯部屋務平「アイヌの
生活文化」講ず。「即興ばなし」再読、通を作すべきなり。
二十日 雨、絶ち家居無一物
二十一日(日)一四〇〇出掛ける 帰途まりとしいん三郎を見る 年にゆく、一八、〇〇 降雪
けふ今女子ラジオ「海の歌」研究のこと。なる文おも、断らるるを待つ
夜文芸世紀のためにトラ「ちゃんの安」を書く。留守中、いくぼ来りし
由。
二十二日 終日家居、十雨。夕方ラジオ電話来、建北を講習所へ合格の由。
二十三日 一〇〇〇女浮文学ゆきを投一班に。ラジオ「蒙古民族」、芸文、岩井大慧
氏、接拶、生方文化学院にゆく。芸海と小説、書一食後南アジア研究所へゆく
を一人明宴録を見る。夜久保を訪ねし留守。

岩波文庫「毛詩抄」(二)を購入。

二十四日　一三。○研究所にゆく。白鳥先生四月一日より出勤せぬかと云はる。かの巡査拙かりし故、何となりしやと。一六、三。帰宅。父子連の在京保証人頼み来る。

二十五日　九。○けさ早くより会はず。一〇。○昨夕「四南征日記」書き終り、一四。○来りし肥下に十万枚を渡す。「婦人公論」の評論内容について四月二十日

二十六日　一三。研究所へゆく。三十分程、明宮様と共に来る。潮君と話せしのち、夜に入り久保君対談事務の五の日なりしなる。けの「婦人公論」「中央公論」を送附。（四南丸に着せし旅客のこと）

二十七日　けの研究所休む。朝より防空演習なれど、偶然なる日曜なるか。「新潮」の播磨節代まる四月七日までに出版一篇をものせ。夜「四南征日記」書く。計三十七枚。四月初旬

二十八日（日）雨。終日家居。第一書房より「国民詩」（二）送り来るを見れば、多田君編の「新潮」の巻「赤色標」を書く。夕、新潮のとスコトラ送りしもの也。「四原」

二十九日　午後一時頃より書一寝す。無為。終日。一四。○午堂来る。林敏夫静岡高校へ入れし由。

三十日　一一。○赤羽西氏来訪、若い阿佐谷の中を書く。肥下男子宅へ中を連れ来りしに一月三十九日はり「新松子百」なるの詩作れる。夜佐田男子来信「神宮」と云ふ由。（入学。七尾鉛を知「浜田」国民詩人文学「詩経」を送る）

三十一日　明日より四月とのよい家とし。家居。一四。○。昨日佐田。来訪。一三。○。昨夕。佐田昨日の手紙とかきを送る。スコトラの巻の実君のハガキ書く。佐藤九郎。

四月一日　一一。○。ラジオ会館にて白鳥先生を追悼会あり。会者二千人ほど出。私は、多田、白鳥山、津田、三田の話を聞く。遺族の追悼詩の朗読あり。社会葬。夜に入り帰宅。明日は先生の朗読を聴かるとのことなりし。我は遠慮に出る。羽田先生の朗読。「蘭印地図紀行」買ふ。一七。○帰宅。夕食。

二日　一。三。研究所にゆく。一二、三。池袋のなまぱいて書く。帰宅。夕の和田清先生の新書「支那史論集」贈らる。

三日　神武天皇祭。戦地なる友、入学中の友へ手紙書く。七枚。書、月加田誠「万

経」を来田氏より贈らる。三好達治氏より速達あり、近く創元社にて会ひたき由。
四日(日)一四〇。肥下来り、校了之す。一六、三。建来る。夜警戒管制発令
五日 紙谷家に、田村春雄より来信、外日まで上京しみたる由。我が帰仰を知らせし
也 警戒管制、夜銭湯へゆく
六日 午後研究所、一三〇。帰宅、ひるね。管制つづく。午前中、ひるね。
「スマトラ」と「爪哇」「爪哇」上とを送り来る。
七日 昨夜徒書、寒さの為けのも続いの家居、石川仁太郎君より来信、結婚して製茶
をやり居る由、本社宮平君、横須賀へ勤務の由、外に来去り来信、けのしまの
戒管制解けず。
八日 けのしまの戒管制、一一〇。研究所にゆき清水君に関する復報のことなし。一五〇。帰
宅、山路爽山「紙山家書」三冊、石田寛次「英国と英国人」を贈る。昨南より転
送の今日出版之助(葉師)の信あり。
九日 一〇〇〇研究所、清水君と民族研究所に関し話す、帰途田口にて警報解
除を告ぐる号令し。一六〇。帰宅、留守中千葉来り、四南にゆき三越の人会
ひたしと也、建外出許すは月に一回の由。丸ヶ八の中野佐倉に帰仰療
養の由。
十日 一〇〇〇出勤、市古宙三君来る。午後三越へゆき四南へゆく人達に話す。夜
以久保を訪ひ二二〇〇まで歓談。
十一日(日)昨夜就眠三時間、けの書一冊、一四〇。大阪毎日記者来訪、一七、三。緯宅、三好
達治氏より来信、明日一五〇。創元社に会ひたき由。衛藤利夫「満洲夜話」購
入。「民族学研究」中三冊、同。
十二日 一〇〇〇研究所、一五〇。創元社へゆきしに三好氏来ず、帰れば更報あり、明日延
せしと。
十三日 一〇、三〇。研究所、四〇〇神田にゆき「芭蕉俳諧」「官僚政治二」「転廷論」外更借し
と買ふ。一五、三〇。創元社にゆき三好氏に会ひ、四時半に三好氏と銀座
にゆき夕食奢る。「神宮」北海道は三好氏より。宅後の雨雪(下)
十四日 一〇、三〇。研究所にゆく、白鳥先生居らる、(下)園に八三〇金の陰に帰りしと

十五日 研究所を休む。㋐源氏派遣とのこと。及び妻女の病の由。
而明とのこと、「大隈氏を」の批評あり。午後地下を訪ねつぎ口月子来
せるを伴帰る。帰途松井俊治君を伴い、雨となりて帰る。

十六日 研究所にゆく、筒井菊菊酒二瓶おくる来る

十七日 客なければ休む。野島源次郎来訪用件を聞き来る。

十八日 (日) 二、〇。婦女中郎来訪、連れ来る、共に晩食を帰る、大掃除をしてやし
く清掃。

十九日 二、〇。研究所、雨、南アジア政治文通図」を写して帰る。

二十日 二、〇。研究所、明宝銀万石十年ぶり、球帰、大学二君と目白の五まで送り寄、帰る、夜筒
井来り明治ものの話、けの万石武の録の俺谷の所を読み合す。

二十一日 二、〇。研究所、鎌田君と談す。㋐杉浦正一郎来り、五月二日上京の由。

二十二日 二、一。研究所、一六、三。帰宅、女房帰来を喜ぶ、㋐吉野清君日暮に来訪の由、
「スマトラの統計」来る。

二十三日 二、〇。研究所、スマトラの統計する苦みしし白島を宅 病気の為西止めとなる。清
国神社大祭、三印君濱に派遣と言うし由。

二十四日 清国神社印紙帰の日、二、〇。地下の許へ寄ると行く、筒井と午後教会後へ
散歩、夜ち風呂へ湯休しし行かず。

二十五日 (日) 二、〇。松垣君の家へ酒とちゆく。一三、〇。吉野清君来訪、連来て共
を井の家へ連れゆく。後筒井と銭湯へゆく。新藤千吉より㋐会うなき由。

二十六日 二、〇。研究所、一四、三、三。「スレー氏の学」を見んとかたしし陽生と話せしすん
て帰宅、土山夫人あり。行とのけ有体にて和四郎とお会いす。来面せしとの
なりしや、ハンニンからのもの。㋐田村春雄へ

二十七日 二、〇。出勤、事なし。㋐なし。

二十八日 天長節、訪人なし、筒井と阿佐ヶ谷散歩、共共喜へ寄り一七、五〇円、婦人の
もの。三〇日迄より来る。夜筒井と銭湯へ。㋐九百五二、学歴・満洲江南義塾
三十日 二、〇。研究所、伏見迄来る、一二、〇。五二十四支倍合せ人、ケ学り一〇。月度
く。一八、五。迄も今終り二〇。〇。夕飯。

三十一日 二、〇。研究所、一四、〇。地位すり中郎まで安く。

五月

一日 一一〇〇研究所、電話開通 大阪三七八二 なり、「新潮」五月号来る。夜亀井勇と筒井と来る。阿佐谷の散歩の後筒井と入浴

二日(日) 興亜一二〇〇建来る。一三〇〇肥下来り拉致される。迎り出せば山田新之輔来訪、家にて話し三時ごろの「蛍火」(別紙)なる、煙草の色変わり、芝山宮田なる中尾夕食をしすしを食す。伊藤を訪ねしに不在。花子帰り来合しあり。一九〇〇芝山外(出、新宿にて伊藤と別れ、田人にて喫茶店二軒へゆく。山田今夜西下する。

三日 九〇〇石田孫太郎氏の伝記へ原稿渡れんゆく。小島氏を訪ねる。一六、三〇帰宅。夜筒井と入浴、かたくりを食べる。(手紙)式去氏より「事実と創作」。

四日 一〇、三〇出勤、怪くてせきすれん上る。一五、三〇退勤。新潮社より一、一月、興亜社より

浦和高校で講演をすること。

五日 一〇、〇〇出勤、書きすぎ山敬彦の女来りて「郷愁時代」の原稿のこと、断る。一七、〇〇田谷夫妻の三時居りて文芸世紀の会、中村光夫、ごやりんゆく古沢安次郎氏、青山虎之助氏と別れの日人形、神戸二人前を食べ満腹。(手紙)原稿、興亜二氏へ。

民族学研究所の「民族学」興亜より。

六日 一一〇〇出勤、杉浦の家に電話かけしも出ず、夜筒井を訪ぬ。けれども後先生より「洋学の話」こたいく。

七日 一一〇〇出勤、一三〇〇より「スコトラの民族」に就いて話す。一六、三〇帰宅、杉浦より電報、明日電話かけよとのこと。夜筒井と銭湯。

八日 杉浦に八〇〇電話かけしに一四〇〇ごろ帰りたること。「日本外交一、二」を書き、午後ごろ文藝国会の山岳会の諸氏来り話の明渡せよとのこと。関西紙を送りて断る。肥下を待ちしに来ず、神田にて出て服部の印氏「蒙古との書簡」見せる。会館にやる。田舎者三人ありし、高田馬場「怨婦外紀」を切れるへ夕食後、田舎会に来りし杉浦久美氏を接待し、外出を帰る。阿佐谷にて肥下を帰へ会いノアにて林檎食べしめて別る。けれども「おんなの友」より三〇円。

九日(日) 九〇〇山久保来り、文学会大会に出席の上、つゆ行くべしとつよ。それへ大阪国民の葡萄酒一瓶ばかり訪わる。一一〇〇書一食後大正氏と伊東水にて別れ、帝大

へゆきしに書籍四冊と一三、〇〇まで送つ、予和、如因、加藤信之をはじめ他和漢二名はしば訪し、他和名、新潟へ出かん来まるべし。一二、〇〇頃より夕飯の場所探しまわる日答至り居て羽田、川久保、松本と会食。別れて帰り、と同井を待ちて入湯。一時半中村、諸の多数及び連達して二月分に書くべき詩を考む。

十日　昨夜睡眠一時間のみ、八〇〇出発、倫社に行きて中田、神田、小竹の諸氏に別れ社に出勤。者を病かへゆき（橋工）、女亜研究所へ中村、橋井、志己君と話し、研究所、一五、〇〇退所、一九、三〇より眠る。

十一日　一二、〇〇出所、一三、〇〇浅野君と「万葉式の録」を読む。夜散髪、入湯㋐赤羽高氏来る。「書香」来る。

十二日　欠勤、「南征軍記」のついで五枚書きしのち、夜服下を訪ねしに留守、ユキ下五月分を取り（丸善）とつまり五角を訪ねしに応答なし。赤川氏に左へ送中寄りしばらく話す。丸のと気にかゝる、中婦淡々と訪ねれば全快出勤の由、安心して長話しあり中村、戒警報いまだ解除せず。帰宅。間もなく浦辺君来る。君、筒井来りし由。浦辺、土俗二冊まで来れる也。

十三日　警報継続、なほ欠勤、書寝し、防空壕少し掘る。夜筒井と入湯。（平山）（平山）

十四日　出勤、岩村氏より行軍生活、七区せよと也。川久保に電話してきけば、二〇〇〇の蓄作月給なる由、しかも三冊と、我不知正与。一七、〇〇帰宅。中田より「紙」来る。㋐平野義太郎氏より世五〇〇〇出版研究叢書」にて「インドネシア概説」出版相談の為来れと也、羽田より来信。夜、（平山）君再訪。ヘディン「孤高」と。

十五日　アッツ島に敵上陸の由、不快、夜川久保来る、岩村氏代りとして来る由。えれも不快、筒井より報知来る。松本報解除。五世紀三月。

十六日（日）雨。午後筒井来り、せんべい食べて帰る。終日寝居。伊藤代表来る㋐。

十七日　一一、〇〇出勤、一七、〇〇三十日の会、二〇〇〇帰宅、「婦人公論」終刊号来る、誤植多し。

十八日　一二、〇〇出勤、一日。〇〇興亜院を訪ねんとし西荻窪にかゝるに七時一時天妻出会う。川部氏即ち行くべきを断りし後送りてすしとのこと也。夜筒井来る。

十九日　昨夜眠られず欠勤、岩村氏～断り状、松田氏より五月同盟の㋐出す。夜筒井と入湯。

二十五 終日家居、無客、筒井と話せしのみ。

二十六 欠勤、中河与一氏より㊐、日曜に来れと。田辺を司君より近日帰国と。午後筒井と散歩、内田吟風「古代の蒙古」再購入、筒井日曜、微雨を検査の為帰阪と。

二十七 一〇、三〇出勤、山本五十六と情報部の発表者。一四、三〇広浦和の浦和高校（中学、渡辺を一七、三〇まで）やり、卿地美と共に帰。夜筒井、一才来る。

二十八 朝、山文俊の家に男子、一三、三〇肥下来る、夫婦をそうした也、「肥南俊氏」今日休むべし、共に

（日） いはねの許にて教員会の遺影撮り、中河与一氏を訪ねし男子。夜筒井来る。

二十九 一〇、三〇出勤、上野の方話す中、心配まし（夜父（同会せの㊐書く）。筒井来る。

日曜帰阪を延せしと。外伯書四十三枚受れり。㊐坂入君より。

三十 午後少眠、朝倉地より在郷軍人会会員のしん毒事、研究所より満鉄より電話し、ようやくしかるべき研究会不参をなす。午後白鳥氏来る。外一書房より八、円。

三十一 一〇、〇〇出勤、夜中和田氏をたんぬ会にし共同研究させとなる。一七、〇〇帰宅。月給日也。

二十二 海保氏会日、山文俊より電話、明日より教員へせく由。中河氏より電話せしに明日夜来しと也。

二十三 九、三〇出勤、神経衰弱ゆえに宜し。昨夜夢で田中三郎と酒を入れうんと也。一七、〇〇なるべく夕食、皆さを訪ね、生徒各賞状渡す。山吉報を中明前での空襲のをわびしき也。

父より㊐拾行届を出せし也、反対。

二十四 一〇、三〇出勤、書役食に猫提拵せしのみ。眠続とわれり。

二十五 （日）朝書役を勇ませ一〇眠食の子をしへいく。午後、わ山氏来る。

才、アメリカ長官会議を報ず。

二十六 一〇、三〇出勤、一七、〇〇より二十日の史蹟会を会、山文俊より電報にて不参の報。一九、〇〇帰宅

十月一日 一一、三〇出勤、鎌田君二名欠勤、一五、〇〇帰宅、午後内務日教員に書く。

二日 一一、〇〇出勤、肥下より電話あり、安井英二の長男孫死せしを以て告別式に出る也、

「天、帰宅、出発、肥下と会し一五、〇〇終了後肥下の家にて話す。この夜日教員」の

「原稿十ページを書く。不眠。

三日 一一〇〇出勤、武田録」を読み、自殺論を書き了る。14〇〇より電話、4〇〇〇より㊐帰国届をしたる由。

四日 二〇〇〇出勤、一三〇〇より法瀬正巳君の「広州交州考」面白くなし。㊐浦和の井上幸治君より、中共公論を受て帰国を知りしと。

五日 欠勤、肥下氏つゝの会面。引つゞいて再講。山田五十六之助国死す。

六日 (日)終レ家居、伊藤の「花の宴」再読。夕方入浴、ある男青年より恐喝をうし由㊐

七日 九、三〇出勤、途中新刊出「南方紀」スエ・ヘディン「彷徨する湖」購入、瀬野君民研へ大使をのせし由、一七、三〇帰宅。

八日 九、三〇出勤、一五〇〇時白鳥先生来る。甘のうまるの白の絵を書く気になり、眠れず。

九日 一一〇〇出勤、一三、三〇退出、出野区書まい歩きて疲る。

十日 二〇〇〇出勤、以前の外国好の電話かゝりし由、一六〇〇退出。

十一日 一一〇〇出勤、瀬野君明日より長崎方面出張の由、帰宅入浴、夜筒井来り「切支丹宗門史」上、中おき来る。竹内の電話は「日教医」の挿絵につき。

十二日 二一〇〇出勤、以前不眠のため苦し、肥下宅へ寄りつゝ肥下文月号を持ち来る。

十三日 (日)二一〇〇大垣国司氏来訪、まれるく建来る、大垣君と大垣君の文書をしらべ、ソロモン方面にゆきしらしめば、おやるし。夜筒井と入浴、茶室に故安「日本熊因記」つゝうことをの月井より聞くべし。封満の報告を出せとの㊐

十四日 二一〇〇出勤、一六〇〇より三十四史講合会、14〇〇より帰る。㊐新刊、千葉之

十五日 二一〇〇出勤、新刊、嬉に多積掲載不可能の返事、夜肥下のつゝり来る

十六日 一〇〇〇出勤、一三〇〇14〇〇と自十なんて会い、文部「務室」中く、研究室にゆきしん座談会に出たれ山田吉と一寸、14〇〇と一七〇〇阿仏ケ谷まで出る帰。

十七日 欠勤、赤羽氏来訪、事の伝ふ。と書を終る。夜筒井と入浴、明日宮平女研究所へ入りしと㊐

十八日 欠勤、夜下痢

十九日 出勤二一三〇。一四〇〇退勤、清水文雄氏を官舎に訪ぬ、夜筒井と入浴、就寝

二十日 (日)朝、松井保治氏来訪、昨夜不眠にして苦し、午後筒井来り、一五〇〇帰宅。

来る、アッツ島を守り、大横侵犯と叱らる。一七〇〇より呼吸備に通知来る。世を七三〇。

二十一日 杉並第五国民学校にて、川久保来る。大東亜省への報告のこと。
八、三〇出勤、一七、〇〇帰宅。太田七郎君の訃報作らる、告別式一三、〇〇まで其うしし出席出来なかりし也。胃内癌なれば也んず、二月までとの診断が六月十九日一三、五〇まで保ちし也。二人の交をとりもちし高橋君は入獄中なり。帰途ひさしく亀井勝一郎氏を訪ぬ。

二十二日 九、三〇出勤、大東亜省への届の件にて文房に和田先生を訪ねしも来られず。閲覧証出のみしにて出来ず、石渡君来りし由とれば東印に出、話きくに南方での悪評ありと。帰宅後作家の収入調査定三三〇円とのこと、夜、筒井と散歩。

二十三日 九、三〇出勤、白鳥先生来らる、一二、〇〇帝大、和田先生に大東亜省満洲了承局長今吉教大殿宛の届の御願く。先生、二十四日出をと一家やらめのこと、川久保の代りに断らす。近くは八月に満洲へ同行せぬかと、これは断らず、研究所へ杉並二君入ることまるし枝子これも良くなし。川久保と文房へ行き閲覧室にられ、[illegible]をよむ。一七、〇〇帰宅、大東亜の文関蒙処附す重信。夜、筒井と入浴。

二十四日 九、三〇出勤、浅野君と将棋、帰宅後肥下を訪ねしに既に帰りゐる。往安抱「不」を書く、十六枚

二十五日 一〇、〇〇出勤、白鳥先生来られ、和田先生「同中度了云」と云ふをうれし由、甘うりし甘くよ。睡眠不足のため一五、〇〇帰宅、夜筒井と入浴。

二十六日 九、三〇出勤、一四、〇〇帰宅、空時の用意をす。

二十七日(日) 五、〇〇防空演習、七、三〇杉並第五で空襲演習、救礼、其の他。陸組の斎藤氏、川久保君の姉先生と一緒なり、一七、〇〇終了、入浴、夜筒井来る。「文学界」七月号来る。堀口大学君錦を呈る。

二十八日 九、三〇出勤、一五、〇〇退出、クラス会は竹内に断りしまし。又は空時のまで速達出す。夜二十二、三〇まで演習、斎藤武夫氏、三軒の人にして村上菊一郎君を知る由。

二十九日 一〇、〇〇出勤、一五、〇〇退出、一九、〇〇まで演習。中河与一氏より世紀の会報の刀のことを専と、

三十日 出勤、一三、〇〇肥下を訪ぬ。クラス会のこと聞く、一九、〇〇より演習。世紀の会報に一枚かく。

七月一日 けふより東京都となる、都長官大達茂雄氏は昭南にて御馳走になりしことあり、
一〇、三〇出勤、一七、〇〇帰宅。留守中来りし北村旭君(昭南宣伝班報道班)再び来り、写真画報に詩をとのこと、昭南の思ひ出詩を久し振りにてたのしみなし。

[illegible]

本社員 篠原繁雄氏
報道任務中急逝

本社体育部員篠原繁雄氏は七日午後五時半文部省において報道任務に従事中脳溢血で倒れ直ちに慶應病院に入院したが、間もなく七時五十五分死去した、享年四十二、告別式は九日午後一時から二時まで芝區三田四國町三番地十二号の厳父繁作氏宅で行ふ
氏は東京都出身、昭和二年法大経済學部卒業、在學中は陸上競技部選手として活躍、同四年本社に入社、川崎、鎌倉、横濱の通信部、支局を経て本社地方部に轉じ昭和十二年十二月から五ケ月間中支方面に、同十六年十二月から九ケ月間南方戦線昭南島、スマトラ島方面に従軍、同十七年十二月から体育部勤務となり文部省詰として戦時下の學徒体育方面の記事を担當してゐた、遺族は厳父繁作氏、母堂わかさん、壽子夫人、長男靖詩君(一三)二男夏生君(一二)長女美沙子さん(五ツ)があり、三人の弟はいづれも陸の勇士として第一線に活躍中である

夜筒井と銭湯。[illegible]氏呼演習休みなり。一三、三〇頃電車、鎌田君外へ飛出
しをり、和田氏と浅野君とは田中君とで云はれたる由。

二日 昨夜「文芸世紀」に「スマトラの印象」八枚かき不眠、欠勤、夜氏呼訓練。

三日 一一、〇〇出勤、一四、〇〇退出、夜氏呼訓練、「文学界」稿料一五、〇〇。

四日(日) 七、〇〇より氏呼点閲、分会の納会を去り、雨はげしく寒し、夜筒井来る。

五日 一一、〇〇出勤、一五、三〇退出、夜筒井と入湯。

六日 一一、〇〇出勤、北村君に電話かけしもゐず、「新亜細亜」十月号にスマトラの民族[illegible]来り、良し。

夜「[illegible]」書く

七日 一一、〇〇出勤、白鳥氏来あり、村上石二君入所を決定と不快、浅野君と民研行き

遅くなりしならん、夜筒井と入湯(二十四日の[illegible]の部に村上君引受けし由)。「新女苑」二十五日〆切に詩一篇をと。陸軍美術協会に昨夜の詩を送る。

八日 一〇、〇〇出勤、前田君より電話あり、増田晃君戦死とのこと。一七、〇〇帰宅、夕食後新聞を見ん

しに毎日新聞の篠原繁雄君脳溢血にて死去とのことを知り(?)、篠原君宅へ弔みに行く。(一六、〇〇肥下宅へ寄りしに校了にゆきしと。)

九日 一〇、〇〇出勤、一四、〇〇篠原君父君宅へゆきしに霊柩車の出る直前なり。桐山君らと

[illegible]は如何なりしやと、帰途民研へゆきしに江上君の報告中、待つこと暫しにて

久保と話しゐる中に岡、岩村二氏外出。勝手でも仕方なし。夜筒井と入浴

十日 九、三〇出勤、一四、〇〇帰宅、一七、〇〇赤川草夫氏来訪(?)し茶もちて来訪、二〇、〇〇

亀井昇生、母と来る。靴下買ふ。「李白伝」を急ぐこととす。小竹君「近世支那経済思想」を持参。

十一日(日) 朝松井信治君来訪、夜中野清見君来り泊す。夜にねられず「李白伝」引用の詩

の訳ほとんど完了。

十二日 欠勤、午後ひるかす、夜赤川草夫氏を訪ね長話。帰途外水「未完(?)」[illegible]「風景と[illegible]」

「車塵集」[illegible]「成吉思汗伝」「クレオパトラ」と交換し本五冊を持帰す。赤川夫人[illegible]

十三日 一〇、〇〇出勤、浅野君六月末退職する由、送別会のことを決定、北村君へ電話、夜入湯、

筒井「エーネイス」二冊買ふ。

十四日 一〇、〇〇出勤、村上君来る、近くのすし屋断りし由、十七日のはずをといし来れば[illegible]

はぬ日と肉はしも、夜肥下を訪ねしに、ボート七月号来成。父母祖母危篤の由電

十五日 防空演習、一一〇〇出勤、一四〇〇退出。夜早く寝る。

十六日 防空演習 一一〇〇出勤、一三〇〇肥下より電話あり、主婦和男君上京 新宿駅へ来たるも、やがて京都フルーツパーラーへゆけば、矢主婦俊男は左翼として検挙されしための仕合に面白がりいやがしと、又おとうさしは西姫の和男、広島、海軍となること也、五〇〇〇の汽車にのるとてなる駅まで送り、丸ビルにいねしに防空演習やまる。一七〇〇頃肥下宅へゆきつきト七月号受取て帰る。夜筒井と入浴。

十七日 土 〇〇〇 祖母逝去の電報来る、十九日与んて告別式と。帰路せむることとす。一五〇〇より研究所にて陳鴻君の送別会、大変、陳瀬君ビール、婦業、会ると話多、二〇〇〇済む。

十八日(日) 来客なし、日なし。夕方筒井と荻窪に散歩。

十九日 一〇〇〇出勤、相山君より電話、祖母逝去、明後二十日(土)は半に毎日社へゆくとす。一七〇〇帰宅 祖母葬儀 一五、三〇 宝国寺にて、死去は十六日九一五なり。内宮根二郎、西川満。「文学界」十月号に一篇八月号まで。夜入浴、筒井来る。「新女苑」に「山の湖」書く。

二十日 日曜にて研究所行はずと。但し自島氏と伊豆なるべし。相山君より二十二日会すべしと。家をしばらく妻婚せしと。祖筒井より「ボクロ」会計」。

二十一日 俗日家居、筒井大阪へ帰る

二十二日 一一〇〇研究所へ中もしに書村山君あず、自島氏と電話あり、大変君の家へゆくえ不明 中央公論の編集者を訪ねしるず、毎日会館で映画をしあり、一七、三〇相山君と喫茶 夕食、妻来、微熱、微頭痛。

二十三日 一日家居、夕方内宮館の加先女来る「日本少女」に印象記の話を書けと也

二十四日 終日家居、まちらは書けず「四月号」書く。芙蓉屋「スマトラの従軍人物と経済」とち来る。

二十五日(日) 一三〇〇大阪君来訪、八月除隊となるらし。大沼君内宮根二郎に伝せしはまことらし。肥下まりまる積もちゆく、長野来り、佛和辞典「しゃれ人と会本主義」受る。夜寝りる「海岸、春川氏と浴し松井君と会のち、浅川義紀「馬来語

四週間」定め。

二十六日 李白傳を書くこと進まず。（この日ムッソリーニ退職。）

二十七日 夜肥下を訪ね二三.〇〇まで話す。「散髪す」いやくのむしやりすれどあと眠れずして弱る。

二十八日 久し振りで出所。後瀬、大平二君と話しをれば井久保来る。一六.〇〇 去ん阿佐ヶ谷まで同行。夜入湯。

二十九日 一二.〇〇 研究所へゆき、大東亜省のため「スマトラ、マライの民族」の大要書く。一五.三〇 上野図書館、李白のため也。「主要道路全保」第三冊其落堂ゐて写す。今夜より改念でと女房吐く。

三十日 午後北竹一郎君を訪ねんと西荻窪へゆきしが「民研」七月号、石村君の「郵律相見」を購ひて引返し高円寺散歩。帰宅。中村一氏より保の会作ると葉書訊ね来る。不快

三十一日 無為。李太白書き畢へしとおもうたれど二百字詰五七枚なり。

八月一日（日） 加藤史より四部金入手し喜ぶ。一一.〇〇 鎌倉中村来る。「今古奇観」よむのみ。こんで独立す。

二日 肥下来りて「コギト」八月号の「従軍記」の校正。後日の「後書ね」（再版）と旺文社の「マライ語辞典」購入。

三日 一日「マライ語辞典」をよみて暮す。夕方阿佐ヶ谷へゆき、宮の手紙もち来る。

四日 肩よき呼令状来る 二十四日八時頃中止の由、手縁。夜肥下を訪ね

五日 研究所の書類代を貰はんとて行きしが後藤君不見、連絡了。鎌田君留守、浅野君来会す。帰れば建来りをり、夕食後送れゆく。大阪へとなり也。研究所の帰り電車にて荒木猛（釈十三郎）氏と遭ふ。三月上京、病気して高円寺にゐると也。馬来語伝説集、同船して帰り台北の宿屋で同室す

六日 終日家居、李白書き畢る。不十分なれど致し方なし。五一六枚（二〇〇字詰）

七日 終日家居 赤羽君来るかと思ひし也。

八日（日） 朝衣御宮人会へゆき御参り。赤羽君、炊水二日の中に来べしと也。父より書来、留守として肥下君の方へもゆき一六、三九まで帰る。夜高円寺散歩

九日　一〇、〇〇　研究所（ゆきしん）休れるも、一一、三〇、鎌田君来り後世君の代りくれてくるれば又ハカキかく。一三、三〇、日刊評論社に赤羽氏を訪ね「まるた日」渡す。形行は年末か。喫茶の後帰り一八、〇〇、ラ寝に就く。けの父ラ日史大阪（つまり）を見ぶ世。

十日　後世君ラ連立て、書類ヲ見る由。二〇、〇〇ラ陸軍省へ会一時間半ハカラし

十一日　一〇、三〇、研究所、けのラ書ラ、鎌田君、浜瀬君と帰る。赤川氏ニラ、明日ラ電ることを約束、松井俊治君と散歩。肥下宅へ寄しつキト未成。夜書物整理。田史ラ。留守中ハ鈴木カ。毛糸ラ女ラの洗濯ラ全部三冊ルラ送れし。

十二日　一一、〇〇、古勤ノ金松井君に会ム、一二、〇〇、古勤、一五、〇〇まで用なし、「満鉄弘報課「満洲資源館」を講ム。夜松井君来しが赤川君死来。けの「新女苑」結判三、〇〇、

十三日　一〇、三〇、古勤せしに大多忙なり。外ハ赤鍵を挿とるまゝ帰りと。午過ぎ失敗、村上君来る。一五、三〇過ぎ、夜赤川氏来りて「六十二月」て宅ニゆく、大木怪夫「海ゆに寄て」位し。

（亀井勝一郎ラの話ノ）

十四日　一〇、〇〇、古勤、昭森社宮本氏ニ会ひ君来訪ツレト「西天」位し出よと。返答留保す。知ロ氏ニもあへ会ニせし由。午過ぎ日刊周ニ会を大久保氏を訪ネ日民ラ話し、ひけと喫茶後帰宅、夜肥下宅（ゆきつキト）八月ラ取ラまる。

（ハハクハラ）

肥下ヒラ帰宅の由。

十五日　朝、近くの[illegible]ヒんなりしを以て武田素洋「司馬遼」講入。民研八月ラ購入。

十六日　一一、〇〇、古勤、事なし、未ラけの来る由ラ来ラ、増田君ラ日馬来ラの迫ヒラれと報ヒは嘘ニてはるまか、虚ラるを泣ヒを。「現代」ラ戦ヒの心の活動と、バカもけゆくへ。

十七日　九、三〇、古勤、大ラ忙ヒラ、書一まで新渡、午ニ明実録失しあみ、松宮版「医学読苑」二冊ヒ、一四、〇〇過ぎ、留守中来ヒ。来りしル午中央編ニて帰阪と。夜川久保来訪。服りがたし。けの電ロ宮本君明日来訪と。

十八日　一〇、〇〇、古勤、浜瀬君ラ電報ラ、けの来ずと、午ラ宮本君（昭森社）「四天」の原本持参、引受く。年末までとの約束ラ。一五、三〇、帰れば数男ニ津ラ帰りとり上老ニパイレート、ルビー、クイーン二ハ相ツ、ラらん菓ラ。伍ラ目要し。

十九日 一〇〇〇出勤、中[illegible]氏来り「殿版二十四史目録」一冊借出しゆく。午後渡瀬君に引つもし、なお京駅（ゆもしん）急行券仕十七時まで也、夜は森社宮本氏来訪。
遠の仮繃記届を送り来る。
二十日 五〇〇起床、三食携行して六〇四〇吾直姫路行いの。奈良し弁当も買へて、特急也。二〇〇〇大阪着。二四〇〇函眠る。
二十一日 九〇〇大谷、谷書三冊寄附、佐を已後所ゆき、夕方保で合会の所在を訊ね村岡幸三郎の方を訪ね、後書をつもし様よ、合会（ゆもしん明日六三〇）佐方なお校へ来ると、主婦和男君の母子宅を之舞て、書食後断髪、阪急別館（ゆもしん一人のみ知る）なるよ知り、帰りて近く青月年寄を呼の心後聞きたり、夕方お連と共駒山へゆもし、
二十二日 六三〇寄佐方口氏を様いて矣呼紹賀、呼名小七しと呼正し、蒙人形ゆきそもしや（旦）り丈、三〇キロの散歩（一回しお来す）、最後三二十四吾直八九回寄り恥しとふ。
二十三日 一〇〇〇寄中部家の中野翁を訪ねしん既に除隊、大化孝会合に訪ねあと、朝日新聞社の田村を捕君を訪ね、父の勤をいやも、心サイ指節を歩きて一寸、三〇帰宅。夜七時の改ナ備。「文芸復興」九月号に広告いれお、メクレの大名文句のを書く。
二十四日 六〇〇佐年校会合、一八〇〇終了、すかもし。二〇〇〇睡眠。朱石・第三寄電佐方、逢ったしと。
二十五日 一〇〇〇浪中へゆもしん九時君浪繃の寄女、今君七四丈、弱佐と。四村家へゆもしん老
組、南業、姫路小学成主せしと、合四ゆもしん家庭教師を寄しと、敬よ少しまんとなり、獣はんて来る。来三ゆ合、少し話し、大阪駅ゆもし明九〇〇の急行券購い十合へゆもしん大比姫路文句を、昼三五文は神戸、弱佐と、有り日弱寄まし四中城平知父の勤をゆもしん比後の郵四尾を合合て、ゆもしん郵四尾は展開してらし、家世ゆもを母父をとると話し、蛍よ一寸級ゆて帰り、夜四時帝会へ遅ケて林ゆもしんを佐よ（丹四年事）帰り居り、和よと三人にて話し、二二〇〇帰。
二十六日 九四〇の四車（大阪発）ゆ垂車、大と文と送りゆ来る。宮帝寄るは玄外なりし。九四〇家寄着、阪佐合寄人力車ゆ史と荷物を。
二十七日 朝、筒井来る。一四〇〇肥下を訪ね。夜筒井よと入浴。
㊐ 佐と本六〇帰宅、朝社会部ゆみると、うれし。「大日本青年」十月号ゆ

話をと。中野さんは正成と清廉を伝えを。村上菊一郎君帰宅と。なお大
す。満洲子の為の補助金いつを来おと。
三十八日 朝出文保まり満洲子の為の一〇〇〇円送る。四〇円加毛女より送る。出勤肥下に
昨南経営に出す。夜筒井と散歩。去四五位大石別地名大辞典国家、なれ・ひ海と・琉
球・台湾」売る。すばらし。
三十九日(日) 朝筒井来る。「文学界」九月号、来る。㊐。アッツ島玉砕の実。
三十日 ㊐「文芸世界」九月号。二〇〇出勤、俳句会、昼食、南明堂に寄り、回教圏(中を、前田正
典君に増田先生悼の話をす。分内はのず。「清史稿」購入。
三十一日 「文芸九月号」来る。午後筒井と言問るに散歩。去四氏より事務用紙五百
枚、夜堀口大学来訪

九月一日 けの子出勤、大学、浜せ、村上の三氏、分内より電話かけしに土曜に来る由。一五〇〇午
後帰る来る。一九〇〇数寄戒警報、南方島に敵機来りしなるらし。
二日 一〇〇〇出勤、大学に寄り、俳句会、午後大雨、夜早く寝る。㊐「文学界」
一部買。「南方情勢」に関する隠語を六〇〇〇語まで。
三日 大雷雨、欠勤、夜肥下を訪ね、護国への封筒書く
四日 九、三〇出勤、和田君、鎌田君。一三〇〇退出、回教圏(中を分内と話す。こ六クリーム位
なり。夜筒井と入浴。
五日 午後筒井と芝浦を地へ散歩、留学中肥下コキトの報を知らせる。夜前もしん
行き迷いとなる。スマトラ宮部隊の後田宣之君より往信速達来る。
六日 二〇〇出勤、一三〇〇より歩いて中野まで来る。夜早く寝る。大石氏「年」に話を送る
七日 欠勤、一日家居、無為。
八日 「南洋経済」の原稿を書かず。「あたらし」の校正来る。出勤、一三〇〇退出。
九日 欠勤、中野より氏より原稿の来。無ねもより十七日に信州へ行のあかと。夜筒井と散歩
この日伊藤、新無仕作降服。
十日 出勤、分内より電話あり、明日一〇〇〇地震駅で待ち合す。浅野君朝鮮より
帰り来る。夜肥下を訪ね。
十一日 九、一〇地震着、古本屋をひやかしラテイモア購入。分内と別れ中野一時間程話す。

る後喫茶、ブランド二服と「蕃語外記」もちまりをれし。新七久保で下車、新宿まで
歩き三福にて夕食、夜尚井と入湯、なお中村子一、赤羽二氏断り、日本社宮本
君は夜徳記届いつて同会す。

十二月(日)家居、午後本社宮本君来る。大尉にうしと。夕食して帰る。故本郷君の(下)
「まの大石」(二〇頁まで)初稿出る。

十三日 出勤、都会代表選挙なれど棄権。夜尚井と入湯、清野博士のスマトラ
話りをよむ

十四日 出勤、浅野君午前中来合せ、早く退出、夜尚井散歩に誘ふ。

十五日 日曜勤、午後肥下を訪ねん留守、コギト九月号出来しをもらひ。陸軍省
協会第三回目の来る筈なれど西洋料理一箱。尚井明日退社と。

十六日 出勤、午後陸軍省協会に中村氏他居居らず、翔鶴に中村氏
に会ふ。

十七日 出勤、「西太石」記しをる。平松君と共に新宿駅で会ふ約束をせしに来
松君は来合す。柔華楼で夕食。宮本君より(下)「まの石」初稿出る
ろ。三百頁のつもりなり。

十八日 家居、(下)から出る、昨日なる者男之介二回、我い何等訪ねく書きと思ふ。

十九日(日)九〇〇より防空訓練、午後松井氏来訪、食堂の間、佐藤二郎を訪ねと牛込
若松町に中村氏来る日蔵さ君を訪ねて呉れて了る。帰宅すれば建居る。

二十日 一〇〇〇出勤、一五〇〇村山君の世話せして大学君と松ヶ崎へ行く。この日より「西太石」
の訳にかゝる。要文なり。竹内氏訳「中国新聞倶楽部」来る。

二十五 一〇〇〇出勤、鎌田君と比大の講師になりしてロ号氏に辞任申出でしと。「横
太原始民族の生活」を購ふ。中尾金一郎の発送「宣教」送り来る。

二十六日 正午二三〇〇表参道にて国民協会に中村君会せり。

翔鶴家の婦人会、油屋、せと物屋にかゝる婦人は家政婦なる者来りする。一〇〇〇出
勤、浅野君来る。一四、三〇帰宅すれば女児一三〇〇出生せしと。竹重
重八三〇分と。嬉かりし。

二十七 四八〇 新宿駅で移辞 二〇〇〇新宿駅で移辞 沖縄やうと。大学君に南方なる大学要者のもの「ムラムラと満洲の民

旅性」を三上、島田で印君とやられる由。一三.〇〇帝大に出し大宮亜君の会議に来所とせ。
桜井事件を話し合ふ。正地下来る。皆方面の人従動発表、予科出席。召集延期なく
なる。

二十四日 七.三〇起床、梓に手付けとて直ちに[illegible]女医にかけつけ、注射せしめしも、既に心臓を
飲まし、一一.〇〇以下痢、一七.〇〇再び来り、河北病院に入院せしめよとのこと。但し病室
はなし。その夜中まで看護して見守りしも手おくれとは知らざりし。（まびん）

二十五日 一〇.三〇河北女医に再度診察、直ちに豊多摩病院に入院とする。一二.〇〇自動車
にて入院、渡部秀子女医に葡萄糖、カンフル注射、酸素吸入を行ひしも効なく
三.二五絶命。松井母と家内抱きて帰る。涙のみ。元来丈夫なる子で、下痢、二回位、松井母
に下痢あらば吾にやませしも、吾[illegible]寝しめしにて寝冷えを起せしなるべし。河北女
医と診断[illegible]へいやましも吾。河北病院その他への入院しまさずべきでありしなるか
責でもなし。父としては先延候四ヶ月にして死なす、彼女の死を見て知らしみ。帰
宅後は梓が愛くてならず、「トウチャンバカ」を言はしむ、くすぐり、言っくし、「おいお
ノオウチ」「でてきてね」を先いて泣くに[illegible]やらし也。此まで分娩後は吾世話
し大分体を用ひはじめるごとく発育せしもこれにて死す。[illegible]

二十六日 一〇.〇〇一旦帰宅、葬儀屋に手配や手配たのみ、一六.〇〇納棺、一八.三〇上落合火
葬場の堀に入る。すぐ伯母、和田女史、松井母と吾の四人のみ列す。涙のみ。入棺
前の衣裳の[illegible]。明日八.三〇骨上げと。内に父知る。

二十七日 八.三〇骨上げ、加代女史と柏井母と。香典来る。三.〇〇区役所に死亡届の届と
配給の米を手続。夜亀井昇来る。日大会学と二一.三〇まで話しゆく。

二十八日 一〇.〇〇病院に来て死亡診断書一通を受取り、消毒済の衣類もち帰る。午後出勤。在社
然らしめ。主家の記録[illegible]、日本評論社の面会[illegible]、「少女の友」十月号[illegible]

二十九日 東京菊井女、以前に家政婦として来し工房音楽家の子を許す。
「来る日再び来る。一〇.〇〇出勤、一四.三〇退出。書飯時、池袋にて[illegible]宣伝班に来し[illegible]
れ会ふ。豊南錬成塾に入りて二ヶ月後また南方へゆくと。[illegible]幕下は既にゆきしと。

三十日 出勤、桐山君を電話あり、出勤の途、万年筆をかくしを返させし、直ちには不可と。大協作
山本、巾ゆくとせ。

と。文夫に中を帰れば隣組、市部に出して暮々と。夜スマトラより帰りし田辺君
男来訪、明日一三.〇〇日映へゆくこと。スマトラ写真帖の[illegible]その後の話をなす。二三
.〇〇別る。稲垣浩邦「ニューブリテン」まで行きしと。

八日 日曜 日映に訪ね十二日までにと、大坪なす。一二.〇〇研究所へゆき南亜学報寄せしか、途中で知
蘭の女印象徒路歩き写真。良きなり。一三.三〇池袋駅にて内田（松本）君と男
君と豊島園の日映にゆきしに、岡本部長すでに知と。新橋の本社へゆき伊藤する

死亡診断書
岡本 梓
男
昭和十六年九月二十[illegible]日生（死亡当時一年目）
病名 疫痢
発病 年月日 昭和十八年九月二十三日
死亡 年月日時 九月二十五日午后十一時二十五分
死亡 場所 淀橋区柏木五ノ一三七九 東京都立豊多摩病院
右診断候也
医師 渡部秀子

九日 一三.〇〇東京の加部勝君を訪ねしに十六日済ます出社で、金沢氏君を訪ね、スマトラ
写真帖の話す。その内満鉄を訪ね、豊島君に前日稿を訪ね忙しかりし
一四.〇〇東亜を太平洋協会に訪ねし出征の人等で何とも。一五.五〇帰宅
陸軍の蔵君へ送りのブドー酒としるこのませ色で送りし。周かず。写真帖
ら、中村地平に会ふ由。
男を開く出張中、田中氏に直接あり、十三日すむれば帰宅しえると。帰途
桐山君を訪ねしに留守。もう[illegible]何もかもおろし。

十日 日曜 床版。社行会は主任君の妻君達の反対にて取止めとなりし。一〇.〇〇家を出、
太平洋協会に岡本野氏に会へば清野協会紹介する由。一三.〇〇来た、仕方な

[illegible]

平氏に会う。尾高文伝た「匿」ぼ残かせしと也。中康「学徒手部」働くと。不快のこと多。
八〇〇帰宅。

十月一日 南川達へ依頼に出る。神田の手紙と、妻飯食して学校へゆく。朝之俗謡に呼ばる。清春邦
、のと也。重子女十五まで。
二日 一〇〇出勤、一四〇〇。毎日社（中を「大らか青年」十月号の）を南もしに来訪と。相出
君と一寸話し朝日社（中を伝え木立氏）年出せしに祝子英二に会う。「富」は「
キチイレ」と。同代紙男もしく帰ること、三島君は仙台へ弱じなりと。
三日 けさ重子女来る。一三〇〇迄も出勤、一五〇〇迄出。去る君より「ま
大ら」学問的で良しと。「少女の友」に原稿送る。
四日 出勤、無為。山本氏、南海より。
五日 〇〇出勤、「大らか青年」来る、文芸世界」より一〇〇。午前梓の侵略食べて歯医者
へ行きしも不成。宮より雨。
六日 雨、欠勤、けさ又「西太伝」を訳す。素の教師安雄より。
七日 (日)雨、終日家居、腹痛て而らず。また神経衰弱か。中家は良言
家なる由。
十日 一〇〇出勤、一三〇〇大学の言語学研究会に中を柴田孝助氏、服部四郎氏と
話し、善海を訪ね、日本橋の日本評論社に寄羽氏不在、銀座を歩き
新宿に寄り言日なるに出、すしを食い、赤川を訪ねしに不在、木山捷平氏に会い
喫茶中、十四歳北氏を見、また喫茶、二〇〇帰宅、元重女せけの断る。石重迄
皆分大へ教職と。

十二日 一一〇〇出勤、潜瀬氏と將棋三番。「西太后」を読了る。一七〇〇退出。
十三日 不快、欠勤、なるべく疎散せんとす。文科系、女婦子供、民研考。此(宮)方婚さる。書すもて下痢、夜半久保恢みい来る。美大仙台へ移転さる。
十四日 欠勤、但し下痢、前田医師の往診を乞ふ
十五日 欠勤、但し耳床、「まり」再校了る。此島邸立。
十六日 靖国神社臨時大祭。午後出勤。大塩廉太郎氏、大塩と同じく殺されしこと、大塩と同じく殺されしこと、
十七日(日) 神宮祭。二〇〇大塩国司君来る、大塩廉太郎氏、大塩と同じく殺されしこと、
但し内閣はたれしと、芝山「ひろあ」にて晩餐。月下を訪ひ、月下は、明日十日を
もち出る。一七〇〇二人退去。夕方山之内、「ひろあ」、「ひろあ」にもちる。けふ神宮の
田舞あり(松田みね祖母の実母妹)氏来れり。七十六才。
十八日 出勤、なるし、一五〇〇近くまで、西太后、大塩君お嫁さんに相談に来る。
十九日 出勤、朝日仙台支局の三島英雄君来る。午前中、帝国ホテルに来れる。氏は人形と自神
車事故の責任者なり。夕、筒井来る。氏は、きんぎょのしと、入湯後に帰る。本
棚出る。
二十日 出勤。午文子、唯卵男子を死なしと。午大塩君、九月に出せし也。
二十一日 欠勤、夜筒井の所(中を「若鷹夫妻伝」、吉田茂「地方時代」一冊もらる。れしを
ると也。下痢、吐の気あり。日菊師子君来
二十二日 午日代紙男帰国の挨拶あり。午大塩君へ行の時中豊田の私の雲をん、雑
味くと告げ来し友や鳥越を会れ。南方を語る。信州で初霜や、ゼ菊の花ほとと
もの味く延いみる」日南方仮遺品ほとべ始一つ。
二十三日 欠勤、大東名ず邦和正良氏の電話二回と。建来る。小淡へ宮野いやまみしと、但し延
期なく帰りしと。夜筒井と花
二十四日(日) 九〇〇防空演習。中もる出る。下痢なほる。煙まれ(飢饉)。筒井に教育局保
二十五日 出勤、邦和正良氏に電話せし当字、一六、三。帰宅すれば筒井に教育局保
来りしと、「ひろあ」にて送別の会食、後始末のを引受ける。松井氏も満
洲より帰国者は、婚礼延期と。二、三。筒井さん来り、中二補充に編入の
合格下阿のことを報告。帰陸取止めと。小からし。

二十六日　松田明、明日から立って来訪の由。けめ研究所出発也。㊐田代徒弟へ。散髪。夜筒井と花。出勤の途中赤川さん「西和辞典」講義。

二十七日　朝おるくてたまらず。出勤。松田来らず。筒井と夜八十。

二十八日　出勤。大学君研究室へ。MP氏に小説書しめ。抗夫の書いた和尚人伝記もさる者なり。評判不明。今日より年給男スラトス・トア・プルとなる。松田電話。一七〇〇新宿にて待。すしを阿佐谷にて食べしに阿佐の家へゆく。コキトト。おそく。三二五五三〇〇部と。中野より一〇〇〇。今時の何人と。セルロイドの内、ゴム玉試験をなし大へん面白かりしかし。

二十九日　二〇〇出勤。浪瀬君のみ。「ロアネ報」初校二十三頁のみ出る。一三〇〇新宿駅にて筒井を待ち一四三〇の塩尻行にのり、一七〇〇塩山着。塩山はずれ一泊。

三十日　九〇〇塩山発。甲府にて食をとりのち一一三〇の汽車にのり、下諏訪丸屋旅館に一泊。

三十一日　九五〇の汽車にのり、一五三〇帰宅。留守中伊藤「巷の」さま」着。成大学報

(b)　幸之助宛手紙。帰途、荒宅にて江口三三に会う。

(松江嬢)

一月一日　九三〇出勤。ごろごろ煙草ばかり。日馬さんと四ヶ月振りに会う。ゆゆ女事務室来るがよかった。民族の件の責任を命ずる。ロ亜ネ報三〇〇の校正。赤川君より電話。明日訪ねるとて。帰途赤川さん「主婦の友」を入手。

二日　九三〇出勤。一五三〇帝大いやな言語を研究室で凌辱声のみとり来る。赤川氏を訪ね。喫茶。ゆゆ子一、亀井勝一郎。松山嘉宝「阿佛尼」講義。楊井左氏の「新塩化物」頂戴。史に コプラ華ゴム配給。

三日　九三〇出勤。松山君来しゆえ毎日出勤すべしとのこと。4葉嬢より電話二三〇中断ゆえ也。石田詩と幼女より電話。史偏桃脈を、佐藤君を「支那文学」講義。帰りしにゆゆ。

四日　九三〇出勤。松山君来しゆえ毎日出勤すべしとのこと。4葉嬢より電話二三〇中断ゆえ也。

五日　かしこスキーの学士浪辞典を研究所で購入。4葉嬢来る。国枝の奥さんとて立寄る。

六日　立寄る途の四辛研究所の子猫なるをは殺ばしとのことにて玉国頂る。夜筒井久し振りに来り花。赤川君を駄め。

七日　一〇〇〇出勤。研究所に防空設備すんだ。民研は国立の高大へと。本多塩「風立ちぬ」と「旅人の柳」を頂きて送れと。

八日　(b)無官。異来りて送信船の件を云う。宮家と伊藤に借すべきや知らずと玉子女史

の言。

八日　二、〇〇出勤、眠し。三好豊治氏に「陶淵明」贈る。新潮に印刷して載る。

九日　定勤、文芸する。今年中の傑作を出はれ大木惇夫氏を含む。夕方入浴

夜筒井と花。

十日　鶴巣出勤、無為。本多氏と会ふ。

十一日　羽田、けふ上京、会ひたしと。夜大垣君来訪結婚問題

十二日　池田氏定の羽田に電話せしに明日回答致会の上京と。研究所、講内の

アメリカ研究所と交換をはる。梓月日。佐藤春夫「山日記」購入。

夜筒井と飲む。

十三日　出勤、洗濯君来り巡査部長の会談する。午後羽田と外務省に会ふ。竹田の天方典弥

氏を、民研にやきりと得と聯絡。岩村、佐口と会ひたし工合悪し、一七〇〇円ばかりで帝大にゆ

き松本と四人で鉢の木に会食。二〇〇〇円の散会。石浜先生負傷ゆえ神経衰弱ゆえとはみる由。帰宅「まるたの」出版延期とのこと。

十四日　(日)一五〇〇円久保の許へ電話。しかつこキルケゴール、帰宅すれば筒井来る。出ん

弥寛に物歩。田村春雄十月二十日結婚の由。五時四来田辺五ツ半切と口入条件

宝我。

十五日　出勤、下痢の気味なり。(二十四日の会なり。)一八〇〇玉子おかゆ、夕餉おかゆ、不孰にて中食なり、十八日

芸文と。新文人一家移転なり。中村氏より帰れば塩の大手紙来

訪しみる。鶴岡総宮士宮より所用なりて帰京と、筒井来りて花、疲る。

十六日　けふ研究所に三村君勤めをしている。一四、三〇白多氏来る。

(出勤の途、外村茂氏に会ふ。中谷孝雄ニューヨークに行方西に行る由。

十七日　出勤、夜筒井来りとかと会はず。沖豆ロッパ氏空襲発表。

十八日　白鳥芳郎君と婚姻届。三十五日上野精養軒にて。大谷氏と祝物に来相談す。

本多嬢を挙式(箱根)来る。

十九日　白多家への祝物の件ひつま給を。けふ増田光君の会葬、研究所動手来集。

君来ての話に前田芭典君、杉葉枝にて研究所へ来りしと。

二十日　白多家への祝物二〇〇〇円大谷、浅井君に決して。鎌田君とめにして。午後三時ハヤと落

昭和十七年の夕べに

刻(四十刻 五百)　[illegible]「[illegible]」「[illegible]」

水府　「[illegible]」「[illegible]」

薩摩刻　[illegible]

白梅 ・　[illegible]

さつき (四十五) 八五　[illegible]

あやめ (五匁) 九　[illegible]

ばら (四十五) 四五　[illegible]

なでしこ (四十五) 三二　[illegible]

富貴煙　[illegible]

口付　[illegible]

国華

敷島 (二十本) 一八　[illegible]

みのり (二十本) 一五　[illegible]

朝日 (〃) 一五　[illegible]

カメリヤ (〃) 一〇

鶴合 両切 〃 二〇　[illegible]

ホープ (十本) 一五　[illegible]

エアーシップ (十本) 一二　[illegible]

チエリー (十本) 一〇　[illegible]

リリー (十本) 一〇　[illegible]

ゴルデンバット (十本) 七　[illegible]

蝴蝶 (十本) 六　[illegible]

コハク (金口十本) 四〇　[illegible]

暁 (二十本) 一二　[illegible]

ミユーズ (〃) 一五　「[illegible]」[illegible]

[illegible]

出ん会(河野秀夫藤君と(帰宅父君に之を報す、長男の名登夫と)、祝の品二五、〇〇を調(子の七夜)へたり、一五、〇〇と衣料切符四十五点を急拠のことと了。

二十一日(日) 日なし、千葉まわりにし二ヶ所と会、夜静か[illegible]を(丸き)帰る、丸山信、渡[illegible]事と。夜[illegible]同井来りて八十。

二十二日 防空演習日、白鳥家への祝に漆器贈りしと。

二十三日 新嘗祭、終日家居。

二十四日 出勤、無為、竹内君より電話、杉浦上京(明日五十日学士会館)

二十五日 出勤、一五、〇〇より学士会館に中支一六、三〇杉浦来る、竹内、肥下と四人にて夕食。(保田の二著「[illegible]」「芭蕉論」肥下をつかまる。)

我らとの物言はず、田辺君同君[illegible]七月帰還、部隊に勤むと。

二十六日 防空演習休み、一四、〇〇より上野精養軒に中支白鳥芳郎君と(建島)房子氏との披露宴に列す。市村、池内、加藤、和田諸先生、[illegible]女史、[illegible]諸氏[illegible]。

帰りは大塚[illegible]電報来る、会ひたしと。

二十七日 防空訓練、大塚に聯絡せんと電話せしも通ぜず。(国父、「新亜東亜」の北條誠氏(元円刊中山同人)より話一を十二月十日までにと。「蒙古法の根本原理」「北京案内記」[illegible]へ)

二十八日(日) 無為、大塚よりハガキ、十月帰国、来京話めと。「少女の友」より一二〇。

二十九日 大塚に聯絡とりしに午来ると、白鳥和田二家伺ひ、[illegible]男君出征とて餞別の話あり。台館を訪ね、大塚君と丸ビルにて喫茶、昼食。交通東亜を訪ねしに北條君留守。毎日に田代継男を訪ねれば呂師[illegible]へ出張中と。帰途赤川氏を訪ね、夕食。夜吉川氏来りて十時[illegible]話して引取る。出勤の途、亀井勝一郎に会ひしに中谷[illegible]四[illegible]の[illegible]寄る。[illegible]二十六[illegible]の[illegible]。民法を[illegible]長官

三十日 出勤、作日白鳥先生来られしと、柴田[illegible]君より電話ありしと。(一四、〇〇和田先生卸も泣く。

〈市饌別ものゆく。帰途、稲葉書店「満洲発達史」「満洲国史通論」購入[illegible]「清国通考」二冊、「本草和名」、民研十一月号購め。依子朝から発熱臥床。

十二月一日 発熱臥床、南医師の来診ありしに扁桃腺炎と、[illegible]来訪、十月[illegible]

二日 [illegible]方面[illegible]。[illegible]

[illegible]

三日 下熱。

四日 無熱。夕は研究所の引越手伝ひ。夜勤。

五日(日) 無熱。中野清氏を訪ね、帰れば大垣国司君来訪、帰れてゐるし。ブーゲンベルヒ

中与改航宮戦展表。

六日 定期を買ひ、文学欄の新しき所にのみ校閲にすべし。石田氏の校正来たる。

和田先生改造入荷。白鳥先生二男は即日帰仏と。夜筒井と八。マーシャル島空戦

発表。

七日 雨、欠勤。「西太后」を訳す。

八日 出勤。中野駅にて防空訓練に会ひ、新所寒冷なれば早く帰宅。

九日 出勤前、「交通互恵」に話を送る「南を憶ふ」。稲葉君吉「老海君時代の満

鮮関係」と島山氏一「支那、支那人」講ぬ。午後石田弁を与へ、そこへ

校正とりにゆく。夕暮は与野氏博士と会ふ。夜筒井と花。

十日 一三〇。白鳥先生来られ「ロシヤ人なる民族の歴史」に対する大亜者の希望、印刷

物渡す。今夜は筒井来ず。

十一日 石田先生来られず。㊐ 羽田明へ。夕中野に下車「満洲良弦」遺族に電話あり。

十二日(日) 松井俊治氏来訪、以久保まり満の二五〇円出る。建来り、二十五日

に出校すべしと帰路と。帰宅、寒冷来り、十五日地方へ出ると。夕食して帰

らず。伊藤今夜多忙。

十三日 出勤、石田先生風邪。大東亜者の述言、三上、須田、千塚、島田研究所、市古

の五君に送る。稲垣一月十日。大崎に電話す、今週末会ふと。

十四日 出勤、事なし、「史学民文化」二月号送報(二十五冊)

十五日 出勤、弗羽居多電話、明日出て五時寄所に来ぬと。

十六日 出勤、校正一すやりしも、一五〇〇頃洋行にゆく。「本太郎」は一月か三月と。強合

執筆についての話は公論、文芸春秋、改造と。五子氏を訪ねて話さく。緑

支部書くと・正月霧伊谷と・まゆ・主紙・芭蕉・つ・生産・談と。一八〇〇

辞去(鶴岩永氏はクラブ・ルンペンとり、今年人口陸要多しと)(先日

石田先生と㊐会ふ、中国文化協力会とか、同作人文化部長は

の件々とまるの代表者会代幸治と。かまたの話をしと）。帰宅、増田氏
氏悔の「狼煙」来る。伊女静枝子我の話を愛せしも。

十七日 出勤、用多し、一三〇。油ぬいて「帖本見」、岩波文庫「ボッカチオ」の代りに買ふ
石郷岡中を、文学部の秘書の見るべし謝礼三〇円なし、服部四郎氏亜子
報三号の原稿を送る、来四月号「清朝実録」と「清文虚字指南篇」を
部を送し、我国うは高れなし也、伝田の伸言にて蒙古辞典中止となる由。
石郷を散歩、「白洋の苦旅」講ず、一七〇。石を洋史研究会、〇〇茂氏
多、和田君と帰る。（洋鉄屋の話つまらず、）紙幸中、中村・小田井来る
し由、動乱の数毎まち〳〵犯乱と。

十八日 出勤、月給受ふ、来四月分早出書書を送め、我は月曜、一三〇。来田山中
き「湯陽日記」、神田山中を「大唐西域記」三十、来月暗の状況」、「蒙古
（来月来書命ず）風俗志」「蒙古人の友として」を出山して「孔陵帝伝」
「黒部江源」「清朝国史稿」を山ないて講ず。計四十日ほどなり。（宮本
来、岡井久し振りに来し由）電車にて周辺時を印（大唐六文甲）に会ず。

十九日 （日）丸の家を訪ねとせしも石屋休みの石の手土産をとて取止め、留井来る、わ
山石来、鈴木言来訪。史風邪にて臥床。

二十日 出書書をる為多もし九、三〇。すもやけば大家居既に来、（一〇、三〇石田辞を知らを
訪ね校正取り来り、一三〇。南明堂山中を校正中なり。小学館山田氏を訪ね
薬を食ふ外五冊を受取る、岩波社の氏来合せたり、風邪負のため早く帰宅。
マキヒ、タラリの海苔陽田、五〇。名金浅（中宮居一五〇。名）

二十一日 風邪のため欠勤せし一三〇。吉日るいやを配給の麦今出の、丸の話（婦物のを
を探せしもなし、毒りいやもやみ松。「名勅官物語」西本白川「奈良市常宿」帯
多地「南方文化の建設へ」講ず。松井君はいて様のを話せし由。

二十二日 出勤、国際文化振興会図書室山中を石田氏の校正のを了。おーナス受け、神田山中「蒙
蒙古辞典」「蒙古史記」「プリヤート蒙古民族史」「パラリンの語彙」「アイ語彙」を
講ず、これ以外ヒラ地紙にて仕茶書を「郵社」「隠縁中記」講ず。（満洲近代史）
この五日間に講書費一〇〇円。大日本文化を研究して後後。

二十二日　午後不眠、「大口氏より」に赤ての速達来。「文学界」二月号に初恋自分まるもんと。出勤。無客。

二十四日　徐々年齢二十才以下。出勤、紙出勤。柳田語二氏より来信。手紙出る。

二十五日　大石天皇祭、一〇、三〇。丸の宮家宅を訪ねしに留守、家内の明治会にて不在「郷民地」「親要南北朝通史」「既来ん方法研究」講。夕方中肥下来りし由にて伝言「南山踏雲録」おき来る。午後松井氏訪問来。山の便として酒一升もらう。けふ初の餅搗きをする。

二十六日（日）無客、無客、無客

二十七日　出勤、浅野君来てゐる、松江と当直代り、七八十となる。大峠山電話かけ明日の一七〇〇分銀を訪ねることとす。本日丸（光）氏人ずいぶん、来の礼状、丸ずまた伝り来ずと。なるべく八個上。一、五信とる。変梅せん。

二十八日　一四〇〇。出て新大久保ゆきしと思ったらとりし「蒙古語田園詞」神田に伝出ること。一七〇〇。大峠安と会食、会食、うまうし、ずず銀座一軒にて出民食ひしまつし。山手線ゆうしつれりかえ浅草にて蒲田まいかえて引返す。

二月一日　休暇、無客。

二月二日　平野義太郎氏より「比較部落の基礎要素としての家族及び部落」の校刷いたしく。「新潮」より二月号に発表（一月十五まで）と。午後散髪。

三月三日　近年尽は、筒井より帰宅したりと。七時上京の様なり。夕方入浴、帰りし土屋合祀氏より帰京の知らせ。会う。「原敬」氏気ずうしと聞く。晩年より野崎夫人はゆくへ知れずとせよと思ひまする。けふ「変梅せん」。

昭和十九年

一月一日　終日家居。「比較部落の話」に於けるしらイレート婚について」を書き改むること。

二日　事無し、一五、三〇、荻窪ゆきを岡田氏「未開社会に於ける家族」貸す。

三日 一〇、〇〇 教育法いやもしも駅自、一四、〇〇 加毛女史「教育全集」二冊もち来る。
一五、〇〇 教育法いやを「言研授調査報告」三冊購入。十五日。
四日 一三、〇〇 肥下を訪ひしも様方をゆを訪れしとて留守、奥さん餅屋駅迄に
りて帰る。医中、長野に会ひ、つれ帰る。一七、〇〇 近く帰る。
五日 車なし、今年はじめてまた不眠つづく。
六日 朝夜と不眠、連続五日間なり。雪降り続けるなり。午後建来る、今年微々検
査と。母帰りのかを餅、坐下の葡萄酒二瓶もち来る。
七日 朝夜は一時すぎも寝し様様。一二、〇〇 研究所、三村、浜瀬二氏と話す、手賜日
九来る。筒井夜来り、二月こゝやりへゆくと。母中村の亀井昇来り。
八日 朝夜は三時すぎ寝し寝七三。起茶、研究所日直、様つまく来る、一四三。門流ケ谷に
参集来部の地図買ひ帰る。羽日写「文部国語史」下、受る。
九日(日) 一一、〇〇 松井俊治君、一二、三〇 新山菊一郎君来訪、一二、四五 新宮山本氏
氏と会ひ、一五、〇〇 山下文部の義第三榜君と会ひ、一八、〇〇 帰宅、留守中来
りし大臣図書司君(八、〇〇 再来、不婚社きまりしと、二一、〇〇 帰る。
十日 九、三〇 出勤、明日山一書房へゆく約束す。一五、三〇 帰宅、筒井一八、〇〇 来り二一、
三〇 汽車で帰陵と。外出のみ。
十一日 母来言、橋峠勤。一三、〇〇 出勤、一三、〇〇 神田山一書房へゆき、五、神田敬史、「明南スコトウ
建設教育」「思想江外地訳」「元史記文訳補」「樺太アイヌの伝説」買ふ。
十二日 欠勤、午後、肥下を訪ひ、毒川にゆきて三冊売り、史学雑誌二冊と「蒙古
の情報密」を求めて帰る。
十三日 母羽田、留守宅。後者へ送金、一二、〇〇 出勤、寒し。日ある日とりくるべく留守
め。
十四日 欠勤日なし、晴なれば一五、〇〇 入浴、新年はじめてなり。
十五日 一二、〇〇 出勤、村上の伝説の土をほし様宅へ。西教育法いやもの化粧男の家につゆもしも留守、
煙草をもんでイラ語国史中系統史君来会ひ。
十六日(日) 母文、山田廻茶氏。一〇、三〇 山文信を訪ひし鎌倉へゆきしと。寒し。
十七日 九、〇〇 出勤、二十四史の会に来し後田氏、三上氏、民族のを会ひ、三上氏二月末

浜四氏一月末と。四文伝、和田文氏にはとりしちやかんと。

十六日 一二〇〇出勤 白鳥氏父来る。氏旅の方を急ぐと也。夜叔母の話おつもりの母はなし二〇〇死去、陰心症と。あさう伯母と二人神戸の弟氏宅へゆくと也。

十七日 欠勤、書一本来る。他人事なし、寒し。

二十日 文通を垂 三二〇〇迄 ◎ 迄 ◎ 拙宅は来ず。ゆきよ松子寄へ来る しらんやく、これで四回目と。欠勤 無事。

二十一日 欠勤、無事。みかんの配給会なし多。

二十二日 一一、三〇出勤、無事、寒し。帰途 阿佐谷へゆき松田つる伯母の骨を拾ひ。船橋と共に小母来りをり。

二十三日(日) 朝すしのイレイト書く。一六〇〇新義嬢来訪、夜阿佐谷へつる伯母の遺骨、食に当る会。すし食て帰る。靴ずれ痛し。

二十四日 白鳥九、三〇出勤、一六〇〇退出、新義嬢より電話、明日会ひたしと。

二十五日 雨、欠勤、足痛く外出ず、昨日来し「安津の研究」を読了へ、無事。

二十六日 欠勤、「文通を垂」一月も来る。孫がくるとし。夜木村寅平大財来訪、南京豆送る。

二十七日 知明にて出勤すれば大倉利兵君 應召と。同君は庶務にて歓迎しあしんを囲む。明後日送別会とき決る。帰途 先村「十三世紀を西文洋史序説」松四ヵ巻「新婦人の文化史論」購入。

二十八日 出勤、沖信にて稲葉瀬川「紅野岐」購入。鎌田三村君来る、須瀬君と大倉家にゆき接拶す、帰途大倉君に鯉近。新宿にて須瀬君と別る。◎ 毒羽君より「まだ日」のカバーに処女の絵を用ひしと。

二十九日 出勤、地垂子報の校正刷拝受、一二〇〇銀座 聖路「山茶寮」にゆく、大倉君の送別会あり。同級生、研究所、浅野君と接勢十三名、大倉君家人のみまれば母とともにと。「宴接膳会」「瀬戸肌の美のる精神」、長谷の母性の美接吻する。一四〇〇散会、新橋の某所にて森、◎ 君、◎ 君らと呑む、◎ 君と阿佐谷へ行、二一〇〇出発を送る。学生 不眠の中止す。◎ 銀座近辺にて酒に酔ひ故に三十日 木曜、終り家居、「文通を垂」三二〇〇来る。

◎「満支史研究会」鳥山喜一「満鮮文化史論」購入。沖信にて「宝物集」購入。

三日 当番。松記世史午より東出勤、大原君上京の出発まぎはに手紙の配し
牛肉を受へたりと。三郎君にやらし、予は出版会に出し、然る所君あず、かも
ひ京君に会「ば」「回答」発刊の由、直ちに堀邸に寄まると、帰途新宿紅印国
屋にてうイルキレツ「コレ語英語辞典」購ふ。出版会にて四郎社の宮本君に
逢ひしが、伊藤書記と合流、「四方山」は出すべし。マーシャル敵来襲と。

二日 出勤、出版会より電話、学報送附の要なしと、実を風吹く早く帰宅。池
袋にて太田氏に「日本古刹巡礼」を買ふ。
二日 出勤、毎日、夜川久保来り雑誌和田先生にもちゆくと。「民研」のため六〇〇わ
たす。「新潮」二月号来る、「スマトラ新征」わが三〇〇となる。
三日 雪降る。欠勤、田末吉来る。林檎買ふ。卵五ケ配給、マーシャルのみ未だ残表なし。
四日 雨、欠勤、夏蜜柑より紙の配給。
五日 出勤、校正をし、一四〇〇過ぎ、森川君の所にて「文部自叙伝」「教育ラジオ」を
買ひ、手帖用紙印刷のものを買ふ。肥下の家にて、「ポート」発出の準備しは来
ぬ由、一七〇〇帰宅、本日マーシャル諸島の南上陸について発表あり、全世界
りしんオットの二ケ所に上陸と。
六日(日)一三〇〇堀辺氏を訪ね、塚山、鈴木、中山氏等の三君も来る、吉満義彦氏も
来会す。津村信夫氏の肺の病気にて回復、近東奏と。塚山君来り、一七〇〇
去る。午「回答」をくれ」を回答作刊をなすべし。
七日 出勤、一三〇〇渡瀬君と出版会へ、然谷君、山田沼氏、曽木氏来会し、なるべく
浜中は代のべし、南明堂へ寄ろう。出版会へ引返し、然谷君の四二氏と学工会館にて
夕食。雪降るのみ。
八日 午前は恒例会。民族の予定をなす。然谷君と日曜に相談するかを出す。
九日 一二、三〇出勤、一四〇〇多摩川へ出し寒し、渡野君兄君と一寸話せしのち帰る。
会報仁「満洲国」購ふ。「民研」十二月号来る。「改造」四月号、四月新潮をなる
るとの推薦状。
十日 出勤、然谷君に電話せしに日曜来ると。一四〇〇文学中を吉木宮本氏に会はしに
四段好出紙と。報、白鳥芳郎二君に民族の原稿なるも、帰りの電ない前は直接

君に会うし、宇野さん、喜陽ゆめて海軍々人と変しに青木・浅野二君の言合あり。

十一日 紀元節。来客なし、一四〇〇。肥下を訪うしい外出、森山氏を同そしい旅行、肥下今さきて、(来りし由、丸の家へゆかんとせし途中にて国元に会あり、上海南まおり伝あり、左を(は近々出発らし。子供を思あり。後直を見せらると。帰りて配給の菓子食あり。肉も配給あり。

十二日 一〇、〇〇出勤、石田、三和の二君のみ、両君の帰りしのち一時間ほどして帰る。竹内国報局に電話せしに竹内庶務君は「実家より、夕方建来り、ノート二冊受る。大は大言を吐くる由、「文子号」の立野如又子速達、彼は三月ごろ帰る由。

十三日(日) 来客なし、ほし柿、ありけん物入る、久し振りて入浴。

十四日 出勤、民族の和上、鎌田、大金三君の原稿をみる。原稿用紙の紙とりに来りしを以てわたす。帰途和田氏それに会あ、「大分元気に成りし」とそれは「まだそんなか」とそはる。帰宅の途、森山氏により、「日本研究」三冊もち帰る。

十五日 出勤、一四〇〇浴せ、大金、和上、鎌田四君の原稿もち(用)明日愛にゆく途中、出版会にもち、原書強要して受取らしむ、南明、三月中にやる由、実、遅いるればと。山ちゃんやま「キリヤーク語」や島武男「蒙古語文典」購あ。岩本君来、この頃方伝はいかいと。帰途の電ちゃんて楊井克己君に会あ。

十六日 弟大へゆく途中、和田氏に会あ、服部四郎氏の原稿はかのらし、善海居ず、文学にゆき「盧龍塞略」見る。雪より寒し、夜常会、ゆまに出る、蹴鞠は三人帰宅のみと。

十七日 出勤、十五日がスつけばるしんしで起く失火の訳と。一四〇〇学習院に(添せ)女と(と)多美を訪ねしに留守、お宅(同)に(と)行き合せず、帰途竹内氏宅を訪ね陳名を訪く。中支に来る前陸久能君と同じと。五宿で下りしに宮坂君に会あ。高田正典君を訪ね、北亜学報の原稿もらい、民族のを渡す。夕刻に南北アジア会研究のと載す。斎藤裕夫入営中病状の便り、本住田、元気に活動。

十八日 出勤、寒し、トラック強奪に敵来襲。竹内、市住田に田。

十九日 昨夜雪降る、二、〇〇出勤、徴用の件大谷亜書唱社と書きて置きもらし、一四〇〇

石田君と文学（、山之内、渡瀬）君と来会。「南方の国々」「南方熱帯の植物」
「歌」購入。

二十日（日）㊐㊐㊐田舎、後日延ばしくれと、一五：肥下来る、ニヤトの原稿をかる。

二十一日 書籍、早く出勤、一三：〇文学に向ひ「スマトラ」購入。「農方のしかイレート」など
絶る。㊐田中三郎、十吉松二郎来る。

二十二日 出勤、出版会より又〇届迄り帰し来る。前田直典君来る、四月来まで民族学を
文学へ、皇紀、皇紀会より。㊐藤森達也氏より新月通知。「ヨ牙物語り辞典」受取。

二十三日 出勤、文学史学会の鎌田君の話あり。㊐義森氏へ。

二十四日 出勤、雨、論文の書き直しを了へ、ツバース半ばまで、二〇：帰宅。

二十五日 出勤、南洋亜細亜学研究部にては展覧と決定と。文学、神田山中を「世界の言葉」
パンカー「蘭語辞典」「ダンロッ語々彙」「金版印度史」買ふ。ルポート、クエビリン
て安人四十五名、安尼二十名全滅、大財吉羽侯爵戦死と発表（二月二日）。

二十六日 朝モンゴル民族学研究所を出て、行合、高橋通勤所出、宮下広外部国体の了書体上と。
一三：〇文学山中を渡瀬君と会へ山中上達中氏「皇根源流」の校訂を
頼を什画すと、また研究所の決戦体制なつて迷ふ。一五：〇神田山中を出られて
「明文清言通紀」買ふ、二五：〇也。夜妹帰来り話す。

二十七日（日）㊐橋野勤氏より新聞社より二五円と同時着、妻を帰田先紀「デカルト」来る
一四：〇松井俊治君来り話中、三月一日まで戦、戒厳令と。富田Sいやをしれ
なし。留守中大臣国司君来られ由。防空壕掘しとなる。

二十八日 書籍出勤、三十四人の会所止め、タラオ・ガラ島その他へ翻来語の発表。父より㊐大、
太吉、皇之助、国生院受験と、口答陸の人の四、五六士官と。
二十九日 昨夜咳甚しかりし、皇勤せんと思ひしが、自分と妻との聯絡のためやをしん、明日来
よと。出版通書形南の柳沢氏より「日民の合起を促す」相是れと
電話あり、断る。松尾、佐治氏に電話せしに原稿用紙費、二十五日迄と。留
守中、市橋一君来訪と。結核のため陸陽なり。

三月一日 一〇：〇下坂君来訪、咳し痩せおり、軍曹となりしと。一二：〇やをしん知田君
のみ、松尾女史やかて来り南洋亜ぬる、一四：〇渡瀬君来り、とりあえず陸

い白鳥氏を訪ぬ。支亜民族概要を作る計画のため。けふ大学君高宅
宅より電話、岡山へ疎開と。けふ千歳書房より一四円、名刺送料の稿
料と。

二日　春めく。一二〇〇出勤、和田久徳氏来り、疎開を薦めて茅ヶ崎に移住し、研究所
も止むと。手塚君来る。「ロウ人経済」購入、人経学いと思はねばなり。

三日　出勤、牧山鎮四二君不快なり。「ロウ人経済」を研究所に送し、松村氏を訪
「接収」購入。月曜「年鑑」あすみ出しに対人名録より除かる。

四日　出勤、和田、石田二君と松沢嬢、昨夜大学亜民族概要の浄書くたび眠不足
なり。大学君高宅へ伺ひ、ちゆく。門倉ケ谷にて「蒙古概要」「大黄河」購入。

五日（日）大雪、昨夜「ロスマトラ諸族の身体呼称」二十七枚書き、眠りしは三時過
か、覚むれば十二時前なり。「文学界」三月号来る。コキレータラワまでしか書
きをらず、時おきて、神経を大変ふいせるを見て不快なり。一四〇〇大来る。
明日の図書について討議終る。一七、三〇帰る。「史上のうえなる満洲族の特性」
書く。田村春雄より㊐、一月分四〇〇〇ルゆくと、下宮より使ひらし。

六日　出勤、大雪積りある。一七〇〇すで大みかん三十も来る。「ロスマトラの身
体呼称」のため、ダカラ、ブラワ、ニラワ三語をしらべ。所得税申告を三一
六円とす。

七日　大雪、夜泊る。一二〇〇出勤、自宅先生来られず、西亜と[illegible]ロヤ等の人の
人の割合い変更す。昨夜経軍行歌作り「南の空」の原稿半ば書き、けふ
大体終る。

八日　出勤、一四〇〇和田先生をお訪ねす。大学君の遺せし原稿のうち、学報のうちより
いろ何を立つ。師岡の方かたを見て、夜おそくまで眠れず、「身体呼
称」強とす。

九日　出勤、手塚君来り、「民族の特性」の原稿受る。和田先生の「保障考」
渡瀬君に手交。松村に電話かけし原稿用紙月曜出来と。宮本氏へ
出す電話、「西方右」の原稿受せてくれと、明日十時まで来訪と。その後

合結成百廿三の内訳は職員のみのもの七、勞務者のみ五、両者合同百十一でこのほか無属のものが相當數に上ると見られるが都では組合法に基づき正當な勞働條件の改善を援助する一方、これにより當事者の生産事業がますく活潑するやう育成を期する

また爭議については努めて勞働委員會の手で調停、仲裁に乗出すほか爭議解剋に円満に解決するやう斡旋するといふが、そのためには正しい勞働運動の情勢判断が何より必要であらう

中國各地區の復員狀況

中國各地區十五日現在の復員狀況並に集結狀況が廿三日第一復員省から発表された

華北地區 三月廿日より同月末迄の間リバーティー九隻で輸送すべく目下準備中

廣東地區 三月十六日よりリバーティー約廿隻配船、厦門は二月七日、汕頭は同廿五日既に輸送完了

南京地區 目下勞役に服してゐる第四十師團を除き安慶、蚌埠方面共に上海に集結完了、第十二軍は三月十五日より四月下旬に亘り上海に集結することに決定、在連絡港軍官民二万は三月中旬よりLST十隻で輸送開始

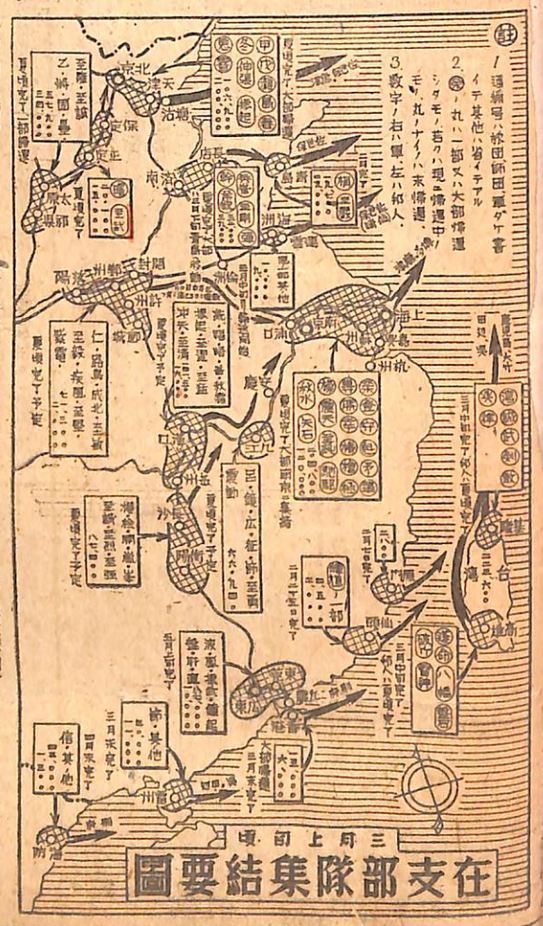
揚子江上流地區 上海へ集結の準備完であるが船腹と還都の関係で未だ具体化してゐない、湖北特に湖南方面は制圧で各部隊の食糧事情過迫し危殆に瀕してゐる

山東方面 約八万の軍民が四十數箇所に分れ陸路青島に集結中だが、途中掠奪を受け罹病者も續出してゐる

平津地區 山西方面からの進出困難で依然山西省内に駐屯狀態

海南島 三月十二日よりリバーティー七隻で廿日頃までに乘船完了した

火事 【京都】廿三日午後一時廿五分濱町二の二精米業長井喜治方から発火、二棟五四坪全焼、四棟六二坪半焼



【女の手帳】

古代法に學ぶ

日夏 敏

萩山信夫
萩田重政

決定、明日十時まで出勤を約す。帰途ベルナウイーク「大亜細亜の原住民族」講演。良を伴らし。夜、宮本君への手紙、満鮮の原稿（鮮語のみ未完）を書き、「身体呼吸」をつづる。四十三枚。ひま書き振りに入浴し体を休めしに三九キロあり、我が生涯のレコードとなる。

十日 一〇〇〇出勤、宮本君より電話あり、原稿一通向井氏、会議は通すとなる。服部四郎氏を市に訪ねしに病欠、妻・海に会い民族の物性について。下落合の服部邸を訪ねしに、断りのハガキ出せしと、男が帰りて入りてるる也来る由、目的のため民族ありなれば家棚となれ二五〇円と、出版宣言「満鮮」買う。㊐父、大学、大学部一次通り国会院は止めると也、「書斎」一、十二月号来る。布施一去君、しかイレートに非ず、スナハーチェストなり。後りる。大垣国司君来始して断らんとし、良き話書きて送り来れり。手の雨。足は来の大勝利はデマなるをほぼ確実。

十一日 一二〇〇出勤、読世君、三村君、松沢嬢のみ。牛塚君の原稿を返し、一七〇〇退出。「満洲旅の物性」ほぼ成安を得たり。

十二日(日) 二一〇〇松井保治君来訪。話集を積る。森川氏へ手紙書きしも宛名不明にて。肥下君手中来り、同人雑誌、殊るは「文芸世紀」と「文芸日本」の二誌と。コキトの世紀合併断ると。牛塚松井君書き「吟双流歌」をびらかす。「原」の原稿了る。

十三日 当番にて早く出勤、白鳥先生来らず、二十四日の会とて和田先生見え、「亜細亜」三号のトップをお頼みせしに話る。来かねし。二十日満洲へ旅行社ていせ発、四月初帰来せると。帰来、民族の原稿かもしも、いま五十枚。二十二時。

十四日 昨夜小眠、けいばるし、一三〇〇退出。歯科医にかかる。創元社にて原稿わたし、森川君に五百円餞、仕事を助「人物論叢」講ひ。門仮名駅にて多忙久子氏の帰来にて帰る、歯科医にかかりたる奥歯の神経殺すとて痛く二三〇〇まで苦闘。原稿かけず。民研一月号来る、つまらず。

十五日 出勤、民族かきつづけ、中内肥下を訪ぬ。コキト文芸世紀合併ことわり、やれるだけつづける由、帰来、水田、大垣、葉師るの原稿返り、民族かく。

十六日 午前中、民族了一五三枚。研文社へゆく、石田君九十枚、編輯了し呉る。白石氏来る。四月分を女子学習院出の人来ると。他にもう積一百五円とせよと。午場君の入所もきまりしらし。病者困惑す。原稿用紙月曜にて四君とりいれゆき呉ると。

十七日 けふは風邪休暇とす。「ウイレート」明日一日にて終らん。他に事なし。㊐三好達治氏へ。

十八日 出勤、雨、和田久徳君廣君と。文庫へゆきしも和田氏を来らず、一四、三。お宅へ伺ひ奥様に伺ひ様子を聞く。昨日相談場まで通知、今朝入営と。筒井落合、昨夜のちゃんへゆけず、古賀音船の事社勤めと。㊐「ウイレート」一八六枚。夕方より雪となる。㊐葉師匠へ

十九日 一三、〇。本和製要君来り、一四、三。帰る。りんケの対策三冊を子ゆ、しち葉子呉れたり。㊐筒井へ、日刊評論社より印紙五千枚来る。原稿用紙とり来る。一五、〇。大谷君

二十日 出勤、鐘田来り変る、石田君原稿用紙とり来る。一五、〇。大谷君八、〇。お宅、原稿紙のお礼を徳治君と訪ひ、ついでに「大金口」と「冬の都」を来る（一六、五。十一、八。）㊐「海賊書」三六、〇。㊐と

二十一日 春季皇霊祭、赤川君氏に（一六、三。）呉る。「女学生叢編」買ふ。建国学中に参りまゐる。大谷ちゃるをほい破宅。

二十二日 出勤二、〇。鐘田外一名の原稿来る。研文堂へゆきキャベルを借る、パンテリーはなし。喜海を訪ひ、五月十五までいい好性ちゃん。文献堂へゆき、左を語、スペイン語、馬来語、上海語の手引買ふ。夜キャベル三頁ほど記しまた。

二十三日 出勤三、〇。昨夜キャベル四頁記し眠れずおりし、民族の出版金多分書く。赤羽君明日一七、〇。来ると。渋谷中学にて教（し生徒三名来り話す。（けふ出勤の途絶各君のしとへつかう酒一瓶しちゃく。）㊐矢口カ一、松井君一吟双港、くれると。赤羽君「まちを」四月中頃出来と。」和田氏を商行機の事合して満洲行やめられしと。

二十四日 出勤、徳治昨日より発熱、けふ近くの南坂士、前田医師の診断を受く。キャベル記し、一七、〇。書りし赤羽君と晩餐、放送し、「まちを」の点を一冊受取る。

一九、三。徳治熱田。おとこよい赤羽君を送りおし、前田医院にゆきしも不在、南坂

一〇、〇。赤川君持への使物いちを呉る。

士を迎へ、致を計れば三六名、餞を、服部屋にて。

二十五日 出勤一〇〇。夜明君外出帰宅されやすしに電話して月賦ルちやくことを了。和田氏に電話せしに「南天の故地と毛情」を書かると。企画屋書く、渡部君。高電話あり。夜るへやくと、多数置きて中なしむ。一三、三〇。手塚君、白多氏、月給袋に徴収手数料一〇〇〇〇に付く、四月分手塚、前田、沼氏、女子四人入社と。一六〇〇〇までに入社者のつりはし、南明堂へやく、「民族の姓」三冊までに見て出来たる。

れいやきルフルク、内藤、湖南「清朝史通論」、「支那史教史」買る。帰途人形を買て買る。依るほどんと全快らし。㊐十万部二印。

二十六日 (日)一〇〇〇 松井伊治君来り、伝言者去「吟双浪妙」やつる。(三、八〇)。食堂のつり去る。㊐ 荒井平治郎。国民服五〇日で出来る由。殿けん九〇〇〇迄、海双書試文す。

二十七日 偽記ふれる、一三〇〇日、評論社にゆき三〇〇円受取り、神田新教堂にゆき大喧嘩し、著作調査報告書取る、一五〇円。研究所にゆき相上り、一六〇〇。お出での和田氏をいろ話ゆ殺ひし、高円寺にて八つ本ヒーラー「アイヌ辞典」(一五、六〇)ピッターン「人類学四冊(四七〇〇)購る。中村地平、田代伝ゝ来り三月に付の事よしなし。

二十八日 雨、久勤、スマトラの民族をしらべ、田村よしの㊐、春秋満洲へやきし也、研究所を止むることを和田氏にいひ出けんと決意す。

二十九日 一二〇〇出勤、沼氏君に埼玉のことを世話す。

三十日 出勤、創元社に電話せしに堅野君。出版のことつも同じてしと、四月三日来よとハガキ、沼氏君一二三〇来り、文房へやき和田氏に辞表申上く、代て本吉郎を同じしに新婚旅行中、平田内蔵吉を訪て、南口せしむ。加藤氏に「支那経済概説」「イラク史」「手初り給の全貌」を購る。

三十一日 一二〇〇出勤 ㊐ 田代君に速達、然各家にて返せと。

南明堂に民族の見て出来せしと出て、石田君と中、別れて白鳥氏宅を問て、辞表申上く、了解されし模様。㊐父より大、自学院入学と。中和地平君、序文考慮と。千葉、山田新吉君代役せしに迄ると。ぼん〳〵事滑らかにゆく。この日鎌田君、われと同感と判明馬鹿らし。

四月一日九〇〇出所、鎌田君を除く全員来る。新しき人として河原君来る。松沢壌子提鞄を盗まる。文房具一生前田君に会ふ、知恵子来られずお宅を訪ねしに行き違ひか。けふ初出勤二を叱りたり。

四月二日雨、一七〇〇大雨を侵し岡代君の家に中せしに留守。仕し帰途は明日妹君にして来たりたりとしたれり、とりて帰る。けさ俊子姉、増りて説服せしも。創元社の紙野より明日来れずとの速達

三日 神武天皇祭、此夜停電ありしため未完の岡代君の文書を出せず。

二〇〇大垣國司君来る、南けば六ヶ月にして再度君を、大垣君の西と手紙と、自己の親族とを預け置く、其の肥下の家に中も論じ大垣君帰りしのち、居せしも。伊藤佐氏所今明日、肥下宅に泊まる。

「ラムの記」と伊信友全集千冊と交換。二〇〇〇伊藤と肥下来る。

四月九〇〇出勤、五時用紙二千枚入手と。佐々木士郎氏来る欠勤。14人後ろ

電話来る、大阪亜者の金受取りと。一三、三〇〇名爲来られ、名學研究員に伝

出られる、佐々木出勤。前田君に蒙信三合伝送のこと依頼、明日出

を約束する。一七、三〇肥下宅にて「南方随筆」縛る。此の夜

帰る見る。㊐。14人後来る二〇〇。明日にて縛る、終かして帰る。

3月 一三、三〇出勤「ゆうと民族園」縛る。至稿用紙二千枚二〇〇〇、研究所の南北

叢書として二十四冊を送る。大垣國司君の家人小松まるを電話、創元

社にて紙野君と話し、岡代君の紙渡す。「探偵の印象」縛る。一八〇〇小松

氏来り、大垣君外り、家を訪ね話解消を申込みしと。まこと。

(南)

瀬戸勝覚（金子）
女四軍考
色探勝覚
ビサヤ語辞典
諸叢書（白石）
島嶼風土記（金）
叢書
蘭人治下の台湾（田中）
南洋郷土
蘭外代考（河原）
古今家語

(北)

島夷志略
こべり中西以民族の標本（村上）
吉林外記
柳辺紀畧（田中）
三合伝覚（前田）
異域記（カマ田）
松漢紀聞（手塚）
西伯利亜偏紀畧
奉使紀畧
維行日
満洲日記
五軍紀（三村）

(文)

清俗紀聞（三村）

六日 一三。〇出勤、医中英著堂にて「中央アジアの過去と現在」「陽育
特選堂」を講ず。記事のを夫とにはるし、七アジア学報の企画届
題る。松江嬢に「ていとてしイ辞典」「ことかおーんの光」を、佐藤嬢
に一六二〇年日本語辞典のを命ず。佐藤氏に印刷の電話せしに書く由。
田代継男より田二。一にはたか。部勝男スラ「ハヤ子」送る砂糖にて会せ
んと。ゆもふの胃五七大しぶとをかからん。田三好直治氏へ、命之私
へ鈴旋の礼。

七日 一〇。〇出勤、三和君に五教組、村上君に堺の話、鎌田君に異域録借す。帰夜、
三ッ田ほい寝しのみにて倦し、一五。〇和田之をお訪ね、亜細亜書の計
画、お話す。先生「君右傾なり」と。帰途安彦「明治の文化変遷」
繙く。義紙社より神単三版の田、地平氏より原稿承諾、二十日頃疎開
と、後ろ姿、姉妹早ち帰り来り、八日疎開と。

八日 九、三。出勤、佐藤嬢「西部東洋合弦」代し、ほい業務書の計画成る。手
塚君点平渡男のお月浪の書番代る。スマトラの民族未だ終らず。

九日 (日)雨、午前中三合刈れす。大ち「海豹」送り来る。哈耶「五月節句の日」か
と。「南の光」に追加の二節書く。大垣へハガキ。一五、三。肥下と訪ね、
コキト同人脱退、絶交のを申渡す。二〇。〇肥下まりし、語寒りて
帰る。夜三三。〇馬来スマトラの民族を要了る。

十日 午塚君に代りて書書す。松山に然る、武田氏への紹介書く。和田之をす電
話、印刷物出来し由。浦部君より原稿来る。「馬来スマトラの民族淡
す。田。松見らすせ。一四。〇退出、田竹内母上、父、赤羽君明日とにしのみ
に来ると。

十一日 一二。〇出勤、楊井君に来訪。一四。〇ラジオ渡勝愛の慣合せ会終りて七
亜の割付。一七、三。赤羽君来り、ピーしのます。川相寿を印之をす来信、
浪牛にて山で竜武君と話合へる由。山右方吉、日向の書函にあって、何
か送らんと。けめは吉日て。

十二日 一一。〇出勤、佐藤本六印に電話せしに、連絡にて遅ると。七亜の割付終り、開明堂

へと後世君に託す。早寝。

十三日　雨、終日亂兵、民族書く。しるて食ふ。臨川寺逢海双書前金ゴと、反駁のハガキ書く、可笑。

十四日　二、〇〇出勤、末宮清之丞宅、山形へ出発。（亡姉泥酔逢後合せしのち、鉛元松田氏主婦の妻妹宮田へ別れ申く。二十日入陽と。佐々木六郎を訪ねしに留守、明日代を訪ねしに留守、相山君と喫茶。朝日で高崎に会ひし。二十日より四日間、十九日より教育講演後宴席と在仰会会を達しあり。

十五日　二、〇〇出勤まで民族書き、出勤後一五、〇〇了。白鳥先生はまられ出版のを考へてをくとの由、いからし。手塚、後世二君に後事を頼み、苟物の整理して帰る。和田竹代さんに逢ひ出発のを伝言をたのむ。丸之氏よりハガキ。けめ手塚君より南は松田中尉帰国とのこと。㊐松田氏、丸之子氏

十六日（日）　高田氏より手紙と「ラッフル」、芸徳社の喜田津衛氏よりとかきをと。十四枚書く。一一、〇〇松井保治氏来る。「春平を訪ぬ」しとのこと、芸高田ちゃんく。赤川氏に一寸寄り、帰途、十要四郎「ロ」と南之那、春蔵夫「ロ」多遊「春平を訪ぬ」留守。㊐赤羽氏へ礼。

十七日　一三、〇〇日本歯科へゆく、林教授に会ふ、歯を磨かぬからと叱られる。山ゼ（ゆき「垂線垂接断記」「満洲国境内記」留守。神田にて オ子ら語スペイン語「四国内」留守。朝日いゆき佐々木さん跡文庫の本。大宮で松岡氏のあと。

十八日　一一、五〇研究所いゆき、書一部後「瀧逢隠覚」を渡す。「諸民族の特性」一、出来。一五、三〇白鳥先生来られ、鎌田君を呼ばれ変ゴと。一七、〇〇すぎまで話られ全般的「靴」し。十の「馬来編第2」講入。古勤前堀辰雄氏の許へ之舞いまし「鎌」して行きし。休憩の文要しるからんと。㊐羽田、肥下、佐々木六郎へ。「支洋之研究」八の五六来る。

十九日　雨、終日家居、父より大い祝として衣料切符送れよと。馬来い組入せる文物を支語上すえんとの高起る。大塚弥吉さんの飯鍋こうられたとの手紙書き明日より聖校せしてゐることとす。㊐羽田へ、明宝飯坂の丁寧のこと。

二十日　九、三〇赤川氏へ。一〇、三〇ロ歯科いゆき七園更衣に会ひ、林教

授ら延行、夜国は[illegible]日十四時い来よと。小学校に毛英訳ねしん㊐辞職と、朝食
印度法一冊とり、南明堂に寄り、中村地平君を訪ね、甘子先れる子と名ばけし由。既に日い帰りしのち迎ると、神谷は君の母護してゐたと甘酒を呑ませ、ウソ吹け、帰りに井の駅徐いて接君一会し、前田君を訪ね「鳥夷を略」作り、菊菊、酒のみて帰り、夕食後古ちん郷軍の訓練、三。〇まで、松田中尉ら㊐、スコトウ同いくあしと也、清井中尉も帰れりと。

二十一日 ㊐清井中尉、栄文堂、父へ。一一、三。研文所(ゆく。エイ法勝覚」後合せ。山ちれて「三雲の書処考」を買い、他にて「夢古土産」購よ。夜逮来る。㊐大より。

二十二日 ㊐加毛和子氏へ。書すも散歩いゆ㊐き、阿佐谷のちかで岩塔文学「日本書紀」見つけ買はんとせしい抱合せと、ひりつけられと買はず。古ちかれて「ストと」書の黎明」買よ。浅田ちけ買。冊数百をも読教す。左奥歯痛し。

二十三日(日) ㊐「文学研究」へ、観会。前田君典、西島大へ。九。〇教歩ひ(〇〇)(〇〇)氏見、蜜いゆく。少しも良き由なれど寝たきり也。加藤君、奥さんと話す。午後、葉つみいゆく。岩切秀吉ら桃奥と干切と送り来る。

二十四日 ㊐若切へ礼、三郎氏へ礼。九。〇伊と木三郎を訪ね、弦氏のむ。一〇、三。左大臣歯とその陣とおく。北園と話ます。午后花宮にて春夫「こんコポーと大人年達」買よ。一五。〇。柴婦君来り、「南の宝」岩波型にて一三。〇。及住と。田中建郎の長女離縁と。二〇。〇。大垣国司君来り、意外にも内地勤務と。小松まよ嬢と結婚すゝむ。井川氏来り、弦氏と祝宴を。印仏堂」とルちゆき寝よ。

二十五日 靖国神社印現祭の日。鳥居外ら寿れ(行くさいて弁りん寄り三五円受取る)。

紙幣入替の後、津服なゆきしし留守。「栄陰氏事」「女西文通史論書」「初建市船拉撃司志」「日本一鑑」「女印度西方の言語の実習」購る「清代通史」の中弓紹す。三十五日と。南明堂に中ましい枝三四十八ページまで送りしと。㊐岩切、清井中尉会ゐたしと。

二十六日 九、三〇日歯にゆき行つと返し。山ちへゆき「清代通史」中と賀湖「夢和錦典」を購し、研文所いゆく、石田、伊藤の二君のみ。安報発刊の今来ると。㊐正研ら一円送れと、㊐倉橋君い関会の現由書く。

二十七日 九、三。家を出、佐々木六郎宅に寄りしも勤務、歯科にゆけば大佐殿と、月曜まで休みなり。国民服の寸法とり、桐山君を訪ねしも勤務、まま師団にゆき、浅井の故中尉に会う。森岡大佐は陸軍と。地下鉄の女女嬌鳴り、前田君を訪ね、研究所にゆけば唱と会ひ中、「南方熱帯の植物栽培」再講入「蘭領ボルネオ」講ず、三和君と帰る。父より㊐ま部岩倉に疎開と。丸光子、前田直吉より㊐。

（「ないて」の手書に」中、下写し）

二十八日 雨、家に、㊐和田兄より「またの」の送り三ヶ処指摘ついく。父、五月半ま部に疎開と。㊐父に。一九。。連帯、小浜の鄙とも来て泊る。「三朝選手宣伝」着く。三。円也。

（然答者宅一寄り佐々木四冊とり帰る。けふ白鳥之丞君に「またの」着きし様子なり。）

二十九日 天長節、祭行様多く盛ん、教室注ん教会し帰れば松井君在り。㊐夕ま部、武夫、四代継男、[illegible]呼郎、桐山兄。

三十日（日）九、。。堀辰雄氏と久舞ゆきしまた要しと。㊐大学「姓氏録考証」の坂上氏の部の写し。ま津史は内田吟風らし。羽田。浅井中尉。書一雨雨、来客なく退屈す。

五月一日 ㊐父、山田彩之輔。けふ部電集接ぎしとなる。一四。。歯科医皆（ゆき右上臼歯抜かる。）神田より日本評論社にゆきしまた要。帰途森本氏に会て話す。帰れば父より「みをつくし」「即興詩人」と往字数等着きある。けふ早ま八三月迄。（岩田秀吉）

二日 ㊐四十歳、谷山彩之輔、本日ま八ま部迄。一三、三。歯皆にゆき区役所より「風土」貰う。和田君の電話せしけれども。中河与一氏より㊐、漢詩見等に執筆要と。㊐谷川、新著千冊ま、相山兄。

三日 ㊐義紙社より「神軍」三版延期と。一三、三。歯皆ゆく、外科はあと一二回と。帰途研究所にゆきしに「南亜之報」三。ちはじめと。和田君の電話す。一七。。和田君来訪、ビールのまま。「またの」八冊来る。土岐善麿氏ほのぼのとうれし由。けふ往路「書きくだし続十八史略」を買う。㊐義紙社へ「神軍」絶版を申出つ。

四日 八、三。佐々木六郎を起し、頃文のみ「またの」一冊与う。左の部勝之輔帰途

と。歯ぬいやく。明日休み土曜一回にて外科終る。出版会いやも武田春浮呼出す。中山で春いし一す会てより、春浮先生相手に相撲始まる。また太日」一冊与る。大学（やもくい美。海欠勤、三好君と研究室にて弁当会て文学へやけば相山で二来る。和田先来学。まく一七。〇四石田新を別れの来合せしとろをとらへ、学報廃刊の由報告。帰途西沢鴻一印宅い寄りフラに接拶、二児となりしと。㊐三好達治、福井（陸南）と。サム研究所の「日西辞書」はロドリゲスの「日葡辞書」の記のを判定「李朝実録」を校書す。

三日
朝、雨、㊐赤羽内氏より接感を借るると。八ケを云へと返信。当印房古へ地平を紹介、地平、大い「李太日」送る。赤川を訪ねい十日まで来食いに田舎へと、夕方森氏を訪ねんとせし家不明。みくに出版社の郎長瀬で夫君に出版計画いつも同合す。「赤羽氏」「長谷川氏」の人が十日迄、中央線陸南と。

六日
八、三。熊谷孝君を訪ね「李太日」贈る。出版会ぬ。セしへスいやかんと云ひ止む。歯ぬいやく、外科終る。山ない寄り「李太日」南もしい愛ぬんらし。な研いやき青木寄氏印君に会ていつん[redacted]を返してしらい「浸象金」貸よ。桜井克之の向の話して田中神社印刷しとろをる由。一二、三〇帰宅、けか㊐伝こ木古郎、こ氏と木のへ。創元社より「南の色」やはり田さと、企画稲田紙屋より来る。他に中山で孝、美海。「美海は第五七のため四。神戸いやしらし。

七日（日）快晴。㊐郎田又夫より、㊐松本美海へ。午後高円寺の松井伊治君を訪ね「海ぬんありて」を返却、コーヒー御馳走となる。桜井菊一印君宅に寄りし留守。

八日
九、三〇。創元社いやを紫郎君に企画届ける。一三〇。宅と。ケより止めの清備。八ケ会て帰宅。㊐赤羽、出版社の「古色」ありと伝む。巻紙社より三版中止迫の迫の話をとハかしはみくくへ。書一寝。

九日
日ぬし、近藤野君に仮名組合を送る。一二〇。文学へやを李朝実録ある。一五〇。退出。一九、三〇建来る。静岡張吉田へやをみしと。

十日
㊐研究所の代てまれる。一四〇。文学、「李朝実録」之、一七〇。より日馬生の話

南が丘、石田君にきけば研究所物資らず、スローモーションなること。

十一日 日曜 文学堂より日曜取りたいと内金と、南合せ書く。校新置へ 315(日)

の申告を再び。姉妹せより「日刊」 五一（〃）とーとミ

一〇 都は取止めと。一四。〇文学、和田氏 二一（五十三）

氏と一すお話し、帰途白鳥氏に会う。一〇（五十四）

帰れば相山君より電報、字夏出来と。十（五十）

十二日 日曜 伊東、第七回の帰還と、大垣君、話の 〇一（五十一）

をわかりと。一三。〇すぐ島を出、和田氏を 〇一（五十）

訪ね久松君への分かり話とスペイン語 二一（五十一）

のかおをつけし、研究所の古服のそいつも 五一（五十）

お預けす。一五。〇お暇まし、毎日新聞へ

ゆき相山君のスストラの家をもらい、四

代継男に会う、十五はまちまちに出発へ

ゆくと。相山君おいや伊藤をとる。

水いて別る。

十三日 日曜 伊東氏と出。文芸世紀の編会を頼まる話と。

一三。〇大きいゆきしル喜海居る、和田氏へ

研究室でお会いし、八〇〇ドリー二世万二千円と

聞く。文学いやは京橋君来る。一五。〇大谷

へ引き上し加藤氏の仏英「清明上河図」

についてのお話聞く。色紙図和田氏へ送

上げ帰る。田伊東と相山君へ。

十四日（日）建来る。一三。〇大垣君来る。ともに外出、

堀辰雄氏を見舞う。大分良しと。赤川の近

くで大垣君と別れ、赤川君のゆきを大川周明「東

英亜侵略史」「インドの文化」「日蓮」

「新しい書」等購入。その前英英堂にゆき

ゆきはこれ9ページ

此文学「後平盛喜也」を買はんとせしに紀念せよと、叱れども聞かず。松茸一、印を訪ひしに留守、外に貴し非ず大なる亜書と。同山伯母を訪ねて帰宅。
けい、夕食を武夫「回想の山々」を贈る。㊐夕食後、前田へ。前田は白魚を買ふ。三
今任賢のカード作りて私に送ることを頼まれし由にて、断り書く。
一、三。宮本君来て「西太后」の原稿返し、テキストルルちゃく、伊藤書店あしと。詩方云し。

十五日㊐山田邸。一三。大學「中華キャバレー」一右返してまた借りし、美海に会って話す。帰途、同田の「未開社会の研究」買ひ、新橋に会ひ、お茶水まで同行。電車中にては松沢嬢と乗合す。帰宅。㊐伊左静祝、中田
午一氏に文芸世紀版を届く。㊐夕食後も、その礼状書く。

十六日㊐大塚、肥下、十合つやと会と。東研「中華青木富夫」に満文の訳わかす。
伝口に蒙研の「蒙古大観」の件すと。歯科「中華東教授の手当受け、歯の
型をとりしに自ら紅茶く、砂糖一斤をお嬢さん。文学「中華三千分」
李朝實録、前田邸へと帰る。伝口の白鳥先生への不平は大学君を
通じて三合任賢のこと断られしと、名を出さぬためなりと。内久保け
ふ来たりしも話せず。夜早寝。

十七日㊐堀口太平君、此方に来と軍君か。はて雨のため文学「中」す。午後西教室「研究し
此叶一印を訪ねんとせしに午葉「移りしと。
十八日㊐午場君、一三。。研究所「寄りしにピクニック、食み会のみ。大峰より電話、明日へ
また行くとのこと。土産の会金を終す。文学「中」、相君に会ひ、和田先生とお話す
「君方帰りしわ」と。古鳥「清人」「支亜の宗教」、真渕「国学史」購ふ。
十九日雨、家居。㊐大、堀口太平。大、脚気にて帰院しをりしと。内田吟風に教はれる
らし。堀口太平は坊を作りとかへのせて呉れしと也。㊐大へ。
二十日㊐父子、夜新宿帰宅一一。上京欲しと、此村英雄教文五月号、金田鶴松氏ル
逝去と。二十分日本「蹴南」と。大子、やはり内田吟風に留よと。松岡正二氏。一三。。
文学「駄き、此之保来り会せしに此て絶交申渡す。三越「中」スマトラ地図三枚
買ふ。大峰に会ひ美味きもの南方史陶にやり陶げば「アヒ」オイナ行と。別れて帰れ

出発、戒警報発令。

二十一日㊐雨、㊐坪井氏「大和軍政記」。天川勇司、満洲より中支へ路進。信州の某君より「大陸医学」の署名を。夫れにかき書く。午后雨やむ。はし警報解行。

二十二日 晴、㊐云し、午后散歩ついでに教室にて「奉語」「乙十七」「語」徳富蘇峰「聖徳記」「聖徳記」を見る。夕、大分宜しき様なり、一五、〇〇警報解除、一〇、〇〇警報。

出発南鳥島に来りしゆえ也、金後、阿佐谷にゆく、九二〇〇出かけ、井上仁梅「西門唐」買う。けふ、うつ南洋土の珍断ひは高桃脚をと。

二十三日㊐十宮根三郎「李太白」を取りし由、桐山氏君、云君と。一四〇〇出、料理中を二〇〇出る。まれ、ゆくべきもの一五、三。奔出足陸ゆきを桐山君を訪ねん毎日社へと、家に帰る。一六、〇〇帰りしと話す。武生駅陽に入る、三ヶ月うと。六月一日入陽と。二十一日夕に別れ、ゆくを結す。ともに家を出、有楽町にて別れ帰れば父来る、年寄りの身病、来い疎開はずれど大陸へ通勤すると也。大の病気は金物不足のうと。三合の酒に酔て眠れり、建来りしをして話す。

二十四日 創立社すの㊐初様出るうと。父一〇、〇去る。翁さの印金位を二冊書完結。一三、〇〇創立社いゆく前の仕てまえの印。家一寸寄り、金社へゆきしい無人、明日一三、〇〇再訪を云ておく。南明堂にすしに宮根南洋土に明日は仕い出来と、民族の勇猛心出しと。文学ゆき、一五、〇〇退出。右男より電報、岡田某氏の急ぎ気に入り出しと。

二十五日㊐中村地平、歌文の拒絶。信州の西沢君より御り状。一一、〇〇千葉書きしは酒二合貰えらし。一二、三。家を出、創立社にて様子をしらし、山ゆいゆき満洲地図買い、外務書ゆきしい稲垣氏印刷ゆく勤と。朝はゆきしい仕てまえ印居留守をつかう。福井基門を呼出し、外に書への紹介状の出。帰途安田氏に寄り、「蓄旅」「中央アジア史」「蒙古の現地」借りる、九月と。明後日来てくれる由。夜、七の様子をうす。

二十六日㊐云し、一四、〇〇文学ゆき、一五、三。手紙から銀座へ歩く、「聯地図」買う。一七、〇〇桐山氏君の歓迎会ゆき一八、三〇退出、帰宅すれば陳年地の文部省武夫君より志君と、お様ゆきしい仕度(来月二十日すぎ)入陽と。

二十七日 雨、外出せず、創立社へ様子と方をかき直る。㊐父、大、末吉、信州の某君、李着もしと。

二十八日（日）晴るし、九.三〇森山氏来り、本六.〇〇にて買ふ、差引五.〇〇なり。つゞいて松井保治氏来り、とも〻附佐藤、古川氏の本屋にゆき、黒本を六七冊買ふ。計一〇.〇〇。一四.三〇松永翁（印）君を訪ひ、外務省への紹介状貰ふ。映画配給社へ代り、成田節男と同席す。

二十九日 九.〇〇和田氏代女史来り、某女専の英語教師とて、履歴書かゝす。宮坂子女史也、一四.〇〇研究所へ行き、南北堂根来らにて帰る、和田久徳君横浜にて待期中と。帰途「北京のシャマニズム」「十訓抄」「明治の字」購ふ。

三十日 一一.〇〇家を出、銀座三越にゆき大東亜地図帳買はんとせしが、好くなければ止め、松田治郎「満洲の史蹟」「満蒙の樹木図説」「満洲地名考」購ふ。外務省にゆき村上君の紹介にて某君と会ひ、ついで其紹介で電信課第二室にゆき岡田尚子嬢のを聞く、良かり、（足立）土曜なれど、書類をもらって用意して帰る。

三十一日 ㊐ 文、二十八日の予定通り東京郊外へ鈴居と、大垣君神田方面へ大垣君。[illegible]（歯科医と）を見はゆきりと。一三.〇〇研究所へ出しに、校正来り居る。文教へゆけば白鳥令息在りと。けふまた本買ふ「南方民族の生態」「満洲史話」。

六月一日 ㊐ 文、本籍[illegible]は行てと、月曜通訳人を（住吉区墨江中一ノ八三 柏原まん氏と）決めし由、一三.三〇文教へ出しに、石田君羽田の校正に来りし。和田君来り一寸お会ひして聞けば久保君またたちかへ[illegible]と。学報五号出された[illegible]早く帰宅。

二日 ㊐ 昭南の宣伝班より木下君（撮影班）石川鉱あり、また出して行く[illegible]手紙をつけて、四條繁夫君への八.〇〇千六百。九.三〇本す。日本に於ける[illegible]宝文鈔出るらし。第一号を[illegible]拒む。一三.三〇文教へゆく、帰りに開明堂へ羽田の校正もちゆく。「支那古代の陸路」買ふ、愚著。「ガバトン」三.〇〇「台湾文化図説」上一二.五〇迄で欲しと思ふし。プールじゃー一五.〇〇円也。

三日 ㊐ 富山房の東洋史辞典の原稿依頼、返事書く。一三.〇〇文教、石田来りしも付ければ、柴田君とう（三合保管のを聞きしに任日のカードルとれし模様。丹波君の家へ寄れば某会社の社長らし。第二第四の土曜が休みと。研究所の移転地として紹介しは丹波の家らし、可嗤。帰途秋宮駅にてカバトンの注文をらる

を見、森山氏いきなりて地平の「ろうの人たち」と題するとりんやし。森山氏徴用出発した。
帰りて父と中野君と宮子さんとハガキ書く。柏井君まりて明日の勤労のための
父合のこと。
四月(日)八。。森羅家にて同田内お嬢同母妹との父合。さらさら母、信子姉と中山帝、
和男さんの伝言を姫子、一。三。中村和子同嬢文子を見る。西村と。家庭文部のこと話
し「富岡鉄斎の研究」もらい「金瓶梅」借りて帰る。なるほど評論社ようまでなの
伊和城り八三五円給迄り来る。
五月 ㊐スマトラを振彩いやきし本(旧田巳)(区男)会うんしと。すい来ると返事。「文海」ろ
やるる支那の話をと。承諾す。研究所(中支化学報一冊貸てあれ)を(四五。十
㊐四八)。和井と文なんやき、帰て敬夫のうち(堀尾敬氏)を訪わしんえ気回復、和
よくなる所南のりしまた」の録音武夫伴もられ、江口三郎を訪ねかりくと
任せしに敬方もと、完遂胃にた器関係して稼ぎすると。二二。。夜帰宅。
六月 ㊐十六
思思より
四南の
家にて
ロ迄り来
る。創と
社の坪の
君ろ迄
のこと。
七月 ㊐五十巻達之印をろ
行くやしれず。南亜学服。
ろ。。家をお
の君を訪わしれ
屋を出もら「湾文化」上「ある新聞学」
於しろし。
中を訪ねて
陸組常金、
ヘルツンとプロクラス、和田二十三
七月 ㊐五十巻達之印をろ
行くやしれず。南亜学服。

支那の詩

桑原武夫

書

緊張した生活にも自づと限がある。さういふ一時をとりして過すか。私は好んで支那のものに接する。例へば唐詩。そして「両人対酌すれば山花開く、一杯一杯また一杯、我醉うて眠らんと欲す。卿しばらく去れ、明朝意あらば琴を抱いて来れ」といつたのに出会ると、これはつと記してある時だが、やはり心が豊かになり、緊張のひまを十分に楽しんだ気がする。

怨

そしてこんな境地に通じた李白といふのはどんな人間だつたらうかと思つたりすると疑多い。しかし一介の支那学ブアンには覗べるひまも勇気もない。

さういふ私には田中克己氏の近業「李太白」(日本評論社刊)は誠に興有かつた。考証綿密、鑑賞適確。しかし素人の私にそんな評語を付せられるのは筆者には迷惑かも知れぬ。

かしこ、李白が異外民族の出としいふ説や、彼の孫女が田夫に嫁し、墓は荒廃に帰したといふところが、引用の多くの詩句に劣らず、私を一種の詩境に誘ふ力があつたことのみいつておかつ。(筆者は東北大助教授)

と。又夫人中も帰れば陸軍、市野氏豊。して。暮々と。夜スマトラ珍しく四回目男来訪、明日一三。日曜（ゆくとて）。スマトラ写真帖のもその後の伝ないず、二三。。明る。（昭和廿年ニューブリテンまで行きしと。

八日 ㊐ 日曜 ラ十二日までいと。天川氏。一二。。研究所（中も南亜学報買ひしが、金一中。和蘭の女性略奪婚」男ふ、良きもの。一三、三。沙漠。駆いて四巴（松ず）。男居と豊島園の日曜中もし、四本部長ずいで知と。弘橋の本私（中も伊なすを

七日 月 ［illegible］ 到 明 影子

和歌之の事を考えて一三一、百五十の。

五日 十二 四一十二 ラ五日 ［illegible］

［illegible］ 明日 ［illegible］

（明日 ［illegible］ 十二日 ［illegible］

男 ［illegible］

男を南に出張中、四本氏出張者。十二日すもい試験し見ると。帰宅相山君を訪ねしに留守。しも軽伊もかしのうし。

九日 一三。。ちかい之の部隊を物もし十ちゆ出私と。金沢弘君を訪ね、スマトラ写真帖のを作ず、その間満鉄を訪ね、豊高者い高田移ちを訪ね、忙しのうし一四。。平野氏を太平洋協会に訪ねし出私の人ちて行ちも。一五、五。帰宅陸軍の前を君に送りのフドー面としるこのを色と述べし。面白ずず。ず㊐出ちず。中村地平い会ちしに。

十日 ㊐ 好天。私行会は主張者の妻君を」の友ちて取出のと。一。。。家を出、太平洋協会に中野氏に会へば清野博士に紹介する中を一三。。来ず、仕方な

く教育中、松井俊治君の勧めを受けて、とし上級、別れて協会に復帰に会
ふに決す。今は学校閉鎖す。学生預け、文ちゃんを、帰郷母は兄さんの電話に
て迎ひ取りをさしのべ、入学の事に面会ゆきしと、帰る。夜建来る。
十一日 建、演習として早朝出つ。田木下君、大亞細亞君。一〇〇〇松井俊治君来る。葡萄酒
飲ませ、一二、三大亞君と共に嬢来る。大亞君未だ健在なし。一四〇〇芝に出てりれ
稲垣治和の日字宅にゆく。うばらんあしし今はヒリッピと、妹君の家をもつて帰り、夕
食後松井俊治君を訪ね、之せ十四日までに国事をとゝのへ、村上君を訪ねしに留守。帰途
森安歩氏に会ふ。
十二日 田木下君、甘利進へ。一三、三〇より白鳥芳郎君の迎り会にゆく。おはもと安飯と。
口腔研究協会の花木君に電話かけしに已に出でし。地図帖のうち南さしに豪宅、
今月中旬再版と。一八〇〇帰れば国田嬢 養子を考慮すと。本民族の女性第二
辞を受けとりて帰る。後松ぬらけ也。
十三日 田父子、村田吉三郎氏来る由。一三〇〇歯医にゆき、神田にゆき、一五〇裏
後五時、白多芳郎君に花を。辞典買ひ、中目迄ひとりゆき、ケイ目の会へ、
宴会をとしん甚しく肥えたり。帰途石田君に会ふ。和田久徳君陸隊に。夜阿
久澤へゆく、芸盤一〇〇目にて解散。なほ文部省君も駆けんと迎へ。
十四日 田羽田、会郷君来、中野清人一満洲に着く、筒井の母。六方面、羽田村田来り之
田南の故郷君紙にハガキ書く。一三〇〇太平洋協会にゆけば、講演一回〇〇
からと。日映にゆき来羽田氏に紹介され、七の五、今より豊島園にゆき象
かすと也、伊藤又五郎来て、本日帰らずと。一四〇〇井の柳より法南へ、後
者は馬来語大辞典の著者。南方呉ケの擅なり也。少し憚れ、一五、三〇辺
ゆけ出して帰る。
十五日 中の清人に八〇キ書き 一三〇〇文化へゆく前田氏来合す、一三、三〇和田文氏に
久徳君陸隊の挨拶中としいろ〳〵叱られ、論文書かねと、男方面すきると也、一七〇〇
松垣家を訪ね、白眼り之合ひ承諾せしも、松柄警戒警報発令、帰れば
田多連達来、六月一杯勤労奉仕、七月初の来て、好都合なり。
十六日 九〇〇〇オルオルて九九州宝塔とると。防空服装にて上面にゆき田校目の板歯をなし。

森安君
松井君
合承諾。

研究会所にゆきしに民族の好悪来たり出来ずと。一七、三〇、松井君の家にゆき母君のお供の上
京し、「なでの品々」買いて帰る。サイパンに敵上陸、十六日夜の事報と。午後
中村他手、来訪かと伺挨拶す。
十七日 曇 朝はう速達、二十五日幸江と。平野義太郎氏より伺挨拶、敵況かすかなれど迅い帰りしと
一一、〇〇 出勤 ゆきしに休なり。一二、〇〇 帰宅、一三、〇〇 稲垣家にゆきしに次の日帰りしとて
一七、〇〇 松井君を訪ねるるなり。午後ル警報つづく、夜より雨。田丸崎より速達、近て南
方へゆく、米の祝してくれと、すぐ来るべし。平野氏に返事書く。
十八日(日) 曇 雨、書斎一部屋、一四、〇〇 散髪にゆき、帰宅後、空襲警報解除、午後中野浩之に「まそほ」送る。夜二、〇〇 また〜空襲警報。
十九日 曇 栗又豊より遠海叢書五〇円と、断り状来す。一一、〇〇 出勤、閣省諸帰注意あり、
研究所にゆけば、この間の会費六〇、と。大五君「まそほ」を送る。夕方空襲解除。
二十日 曇「岩楚考証」に明治と宮崎に鶴吹町とあり、多比を宮崎に断る。四、〇〇 出勤にゆく、この
頃、技術院の給仕なるか、不機嫌にて困る。夜雨、かなり降る。午後空襲警報なりと発
表。「満洲族に於ける弧孔」の研究はい始まり、たい書きてもつまらずと思ふ。
二十一日 曇 午前、出発と。丸三印。芳野氏より「太白道」。一一、〇〇 出勤にゆく、午前中外科
ナシ。研究所にて考察、門仮会にゆき、「つい決定横断記」書きて帰れば建来たり、
夜帰り(中)にて考察、門仮会にゆき、「つい決定横断記」書きて帰れば建来たり、
イート三冊出す来りし也。
二十二日 曇 朝、一〇、三〇 出勤にゆき最後の治療了、書記食堂に休なり、帰宅一三、〇〇 昼食、
夕方門仮会にゆき幸江(伯母)に謝礼三〇円渡す。帰宅 松井君に会い、家に
帰りて休す。午後常会あれど出席せず。
二十三日 曇 大、女達又後近会二十八、中山八郎氏の話と。朝出入隊の挨拶。一三、〇〇 文学へ
ゆき法学部と学部室鈴、この二日、粗相せし。午後マーシャル海戦(十九、二十日の)の
発表あり。
二十四日 曇 朝、午後帰宅迄の代価を拂ひ、ことはずれの点引きれしもの也、一二、〇〇 家を出
文学にゆき、帰宅 丹波鴻一郎を訪い、夕飯馳走する。二〇、三〇 帰宅、防空壕修
繕、けふ一八、〇〇 稲垣君の父来り、老婆子の化粧〇〇て怒鳴れ明日の会合不能と。

二十五日（日）八〇〇すぎ、松井君を訪ね、之合廷朝のことを云い、引続き満洲国の地図二枚買うて帰る。国未さと此夜の場に本年となる。食終るくしるし。

二十六日 国宝鶴吉氏より、場に大、年八〇一三〇〇文後にゆき一五三〇退出。ゆうべ「女と満洲」に於ける弱者の風物」書きはじむ。

二十七日 田口良男君、相山至て代る。一三〇〇文後、和田氏と共に、満洲へ飛行科で行かれし由、一六〇〇文帰国下をお訪ねせしに、お留守、代て末吉の家を訪ねる。

二十八日 甲服部正雄、小戸航空隊より、潮川屋に即ち到着と。文後へゆきしより東津氏後援会で出八時に「清朝八旗の話」聞く、つきず、善海と池代君まで同行、以久保にはたのもうで、留守にて云いし由、帰宅夕、和田久孫君に会てし。食後以久保氏へゆき、心情語る。帰れば津村安吉氏より信来、二十七日二時五分発。

二十九日 十四時葬儀と。

三十日 八、三〇堀辰雄氏を津村の葬儀のことで訪ねし。二十日より独井氏と。文後へゆきしのを報告し、昌亮を部隊に十部隊に右入隊と聞く。池袋一中を翻かえ、民族の話。

七月一日 部ツ、世さい書紙金にて文なしやく、デューカルトの地図字ずをもなしし。和田氏を尋ねしいふイレートのを訊わる、跡合浦紀倫を行く。前田君と帰る。

二日 江口三五、鈴石のを、文、文芸世紀来しの記を記す。

三日 日曜日。花和君より七日ヨ、までいと。一一〇〇文後、書食時見越せを話し、一三、一七ようよ配送の横須賀行に乗り、七銀食ス車津村信吉の分別式に赴く。

完了、川端、第帰軍と、薩信衛、丸山茂、苔会幹吉夫、秀吉君夫妻、信吉夫人に接拶、是更は改生といふ。一七、二〇区別れ、雪ノ下の松園正二君を訪ね、会談一時間、一七、一六の電車にて帰る。

七月一日 田牧帰忠雄君より。文芸世紀と始の君に出す。一三〇〇文後ゆく、白鳥氏をもうポーラス八〇〇日君をつかる。校君に立伝清文館のを訊ねし由、八部安部氏と。一五、三〇神田へゆき逗報堂「台湾通史」「湖南「支部古代史」「支部仏一」「清朝末史」「満州政治」、「某の小部学」「花忠氏会集」購入。計五五円。帰宅後、映画三九丸ばいえりつへと電報、四巳良男に電報みちんゆき会えなし。

二日(日) 九、〇〇 松井君来る。話中、佐々木家族方と共に医師につれ出されし疫病らしと聞き豊子摩病院を相談書記方下熱、建来り 松井君来 りマレーシアトラの話ついく、病院車来る

三日 七、三〇 世約君と言はるいて結合せ、九、〇〇 ネリマ映画をしに回る。の義父といはる一人の人来り、紹てどもたれの人来る、豊島園にて書食後一三、〇〇 映画をしたる。七三分一と南三分一いやいつりと部分あるる。帰宅すれば佐々木一〇、〇〇 ごろ病院に入院と。 松井母、夜直。創之助柴野君より「南の是」再校送りしと。

四日 九、〇〇 整戒整 鼓震 令、松松やもりと入れぜり病院に話をもりし。午後「南の是」の校正をなし、夜治る。同宅の赤病患者ひとし。佐々木元気にて大腸カタルにすもしるらし。

五日 朝、夕食はせずむうしく、三〇〇 ラ後通五回、熱三八度五分とるしい驚く。田大塚図司、夕方ラ六〇〇 ごろ来る。佐々木 良好なる様子、よる段所いゆを帰宅 家郎へ 電。サイパンの私宅 ラ〇〇 要を 相談。

五日 川七病院と家との間を往復。佐々木 良と。夕方 熱降。

夜、病院に泊る。

六日 朝、村上菊一郎のつうの来らしい達。佐々木 重と好し。田 生 経 ラ 〇(八十一ラ)。布村一夫君。女研。青木家 ラ 重話し川 ラ 午二時ゆくを約す。「カラフル」「学生近世史」講。午場 ラ 重話し 校 ラ 重 りくるゆうちの。但し 状況 悪く 近事不明。

七日 朝 午前 二時 ごろ 七川 に 空襲 ありしと、お隣 ラ 防空壕 ラ 入る。九、〇〇 女研 ゆき 青木家 太郎 ゆく 満文の 記 ゆ ラ。佐々木 よく 好し。田 佐田。小家 電 二〇、中野 清之へ。米国 ラ 人を 二千万 乃至 三千万 ゆ ラ と 放言。

九日(日) 午前中に 帰宅、佐田 ラ 自費 ラ 段 視 翻 来る。小南。来客なし、一二、〇〇 ラ まで 病院 ゆく。布村 夫氏 ゆく 「満洲 於 の 物 性」 送る。

十日 八日分四、〇〇 病院 ゆく 佛 ゆ。田なし。夕 松川「南宮 様 蔵」講 ゆ。夜 松井 母 ゆく 宿 泊 ゆ。帰宅すれば 大塚図司君。来合せ ラ、二、〇〇 まで 話す。この

日振る。

十一日 朝より下痢。昨日の方面、回仁郡長官、温秀君無事入隊と。文、ごせくと。午後金原基女の嬢と同宅とす。看護婦を共通とするをし。帰宅。

十二日 回民研二冊。昨夜その外古せず、一五、三〇。寺川氏いわく、一〇〇〇雲り宮城氏「馬の辞典」「海南島」ステテル(イ)「回教と蒙古の辞典」講。帰途病院にすこし伺よる。文氏。

十三日 二、〇〇。家を出、研究所にすこし伺る。君の子、泛せる仏陀の由。帰らんとせしに自動車来らず。一五、〇〇 松沢嬢来る。晴け明快。和田氏満洲行をやめんと。病院にて。(一)ありし由。夜松井君来る。

十四日 熱し。回大学。伺より午後退院。夕方陸氏を礼に猶海一部もらく。帰りて南紀行」買う。白井(松)氏蒙海の下宿せし母より会よ、往路を拾い事由。伺よの入院費用約百円。

十五日 熱し。一三、〇〇 稲垣氏へ中を、来国日の饒氏会と定む。一六、〇〇 左部長官を訪ひし一七、〇〇 帰らると、時間行ち平田の義士を訪まれば、本日忘日せしと。一七、〇〇 長官にて会うしそれは日の光既に朝鮮にすると。帰宅二〇、〇〇 江口三を訪ひ来たる。

夕牛込にて「山家集」遣えし。

十六日(日) 熱し。午後驟雨、夕飯後松井君の家にゆき見合のそれ、山下字「満洲の跡」買う。拙し。

十七日 九、〇〇 家を出、文庫にゆく、暑し。こゝより百科辞典を見しに N までなり。夜防空訓練として自宅にゆく。回なし。

十八日 九、〇〇 家を出、日蓮にゆき金山洋服店にて D 民服出来せしを取る。七三、四〇(税共)。夜 新聞社。四〇。夫より、一三、〇〇 より文庫。一七、〇〇 サイパン全滅公表。うわオ演芸会。この日 回なし。

十九日 回 ロマライ宣伝班の吾妻君、比方の曹長より訪ひ来りしとて 三 より来る。けふ文庫(ゆかず)。暑し。夜 荻窪へ散歩。

三十日 うわオ演内閣辞職を告ぐ。文庫九、三〇。一五、〇〇 寝る。和田氏より会せしに来年四月より南始の西洋文化の支那への影響をやれと。十八の予定 ① 政治 軍事 ② 思想 ③ 技術 ④ 経済、社会に分つこと。回大西一君二十四日頃来ると。

二十一日 田丸を中心に錦州迄の旅行。夕方南京に出る。研究所にて「シャレート」の校正来る（二十五）。すぐして送らねばならぬ。夜疎開を。
南京にて中国報一冊づつ買うて帰る。途中帰る日印刷出る、中報婦人。
鈴木孫芳氏南京へ。武官の紹介「犯罪」を「犯罪」書き、丸山氏に用意し、夕飯後
丸の家を之無いやく。総理大臣小磯国昭。米内光政と合作。
二十二日 田「支那研究」ついて。一〇〇〇文庫、小磯内閣の展望、大達茂雄内相と。電降
る。七日の電は天皇の中ならん。内閣辞表、明久保に会う、総理を見た
り。谷正綱一部「文春」を」買う。留守中紹介の文君来り、メレスのため見
合せ来ると、夜松井君に一応解消をいいやく。七時ごろ気配あり、大宮氏
（ガ）に敵上陸と。この日実を住まり。「日録」玉音。
二十三日（日）大阪君二、三来る、けい子氏の家へ行くと。とし家を出、別れて帰り君
を訪ねて三冊買う。「記」「記」買い「英文会話」買うて
ひとりぼっち。一五〇〇小言和天印を訪ね続て任せしいと言う全く同じ、電話を
置くとちょうど。一七、三〇。女将井を訪ねしいすぐ帰るとのこと。帰来続
々移し工芸のひとつけんとなる。上海にて絵用いるやもしれずと、
二十四日一〇〇〇文学へ行く。「ロンドン通信」「ラジオ」買う、夜帰り氏来る、コキトハ五つ八ツ
更紀」「蓮律の研究」「晴陵日記」買う。
して出る。「新文会集」十冊三〇〇〇。
二十五日九〇〇まで新宮へ出しが留守、文学へ行き一二、三。
こんで文学部送りすみ、一〇時。川久保氏に任せしが同氏不在と。帰途「新宮」
宅へ中しい小倉氏の書はいろいろ根はずと、不審。支那新会経済史」買
って帰る。もっし、不快。夜齋藤茂男氏二人疎開中として接待に来る。
二十六日九、三〇文学へ行く。見君ありて大阪の研究所化をなす、一四〇〇文学部より宅へ行く。
不在、研究室にて待つ中和田氏来る。松田へ会うしい夕飯のため任せず。け
ものの会集年「朝鮮語方言の研究」買って帰てうれし。夕方川久保を訪ね報
告の打合せし、同氏への面会の断りもの。
二十七日一〇〇〇文学和田氏を待ちしい来られず、文学部「記」買いやすい。日はまだ残り

みち、土佐日日書付まをしする。なん夕食をつて出て帰る。日本評論社より又てをしを代請求します。話肉出す。

二十八日　午前中「西太后」記す。一三〇〇新宮駅にて長野氏「い今ゝ、南けば情報るとかて紙本強の疎南、百姓をし、特まの汁を立つると。二宮、尊徳をよむとなり。池袋までやきしん寺別宅錦の紙炊み出れしい気はて研究行いゆく、手紙、鎌田、石田の三君。話もらされい話をし。帰りてまた「西太后」。

二十九日　文なんゆく、午後和田をまられ印ったりたりの文俗と大きいやきしん寺称の人ゐず、殺ケて帰る。帰れば丈無字報の校正まゐたり、けれ和田をん「西太后」。をとゐ殺をて、始終殺をと殺殺す。

三十日(日)雨、涼し。一一、三〇大江国司と吉野君来訪。新井君三冊買よ。

八月一日、朝より文を、八旗通をを之るをします。一五〇〇音之文字部（ゆを一〇〇〇〇巻ゝ、杖をと一寸伝し、山を書店へゆケば主人海宝（志ると、「ルフルク記書」「高洲子孰丸ゝ丸」を南ゝ、南明堂へ杖ゐお等、㊐塚山勇三、海宝へ志ゐ。

「民族の姿」を取りしと。夕食後ゆ文俗んゐ。日おゐ等。

高洲孰一丸ゝ弘ゝ絶望と賀表。

アムゝ、ニ二ヤ弘ゝ絶望と賀表。

一〇、三〇文を、午後中を数々まり、ゆ一四〇〇創之社の此本帰々「南の宝」の三冊。

杖お等、弘ゝ古ヲ、ゐも留所をし、亜洲へ杖ゐのを㊐。

一〇〇〇文を、午後ゆ文俗まりし、一五、三〇創之社へ杖ゐルちゆく途中、一重ゝて連ん

本社員篠原嘉雄氏
報道任務中急逝
住職と共に事中聯盟の碑で倒れ信州
聯盟葬に入院ゆ
告別式は九月廿日午後一時から
十一、告別式は九月廿日午後一時から
七時五十五分発送した、享年四十
時まで生存三日四時三十二時五十二
時ゆ、日本評論社より謝り状。一三〇〇文をんゆく。帰りんゆを之金
紙代三冊買よ。

会ス。㊐ハ山下孝子結婚セシト。亜研ヲ訪ヒ世尺母上教セシモ。夜ハ高橋(太)来ル

四日 一〇、三〇文学、相立ツ二、以久保来ル。㊐ハ亜の(相)再、吉野清、夜華戒警報発令、「日本語」ヲ借物ヲト連達。

五日 ハ契報統行ハ一つ外出セず、一五、〇〇解除、芝同防空壕ヲ夕食後掘リ了ル、無駄ラルヲ要シ。

六日(日) ㊐ハ佐田、服部ト碁、天津ノ池田君。「日本語」二冊。一五、〇〇蓄音後、ハ高橋ヲ訪ハ国芸二番、夕食後蓄音ヲ訪ハ工学ヲ主ニシ官務手帳法ニハ鉛職田鞭ト。

再ビスヘシ。

七日 文学ヘハ中研究所ヘ寄シ防空演習トテ出ラズ、一六、〇〇まで帰ル、南ハ公報一冊ツ、、淡路君ヲ迎シ来リシ「八月旅」ヲ出て帰ル、ヒル両つゝく。

八日 一〇、〇〇文学、淡路、前田二君来ル、十時高橋ノ新宅迄内客ヲシ、歩ハ君ハ寄リシ来客ヲ出て話セず、「夢古しい」ハ相清二ヒヒの文ノリヒヒヲ三冊買ひて帰ル。

九日 一〇、三〇文学、以久保来ルヒヒ、乃井久之助ヒヒの話毎日来リヒヒル、一四、〇〇中国文(華)

ヘ空襲ノ鶴ハ印ヒヒ会ハヒヒヒヒシ不在、㊐海せ君。

計画　八月三十日スミ

1 女ヒ満洲旅ハ於ける弱点

2 「西太后治下の支那」(訳)

3 「蒙人治下のムゥ湾」(訳)

4 清の太祖奴児哈赤の民族政策

5 牡蠣の之ヒヒる湾地図

6 シュイラー「トルキスタン」(訳)

7 シュミット「蒙古流流」(訳)

8 満洲語文法

9 嘯亭雑録 伝柳(ヒ)伝略(ハ)

十日 一〇、三〇文学、和田之ヒヒ南亜ヒ報ヒヒの伝言ヒシ、帰リて夕食後淡路君ヒ訪ハヒヒ、堀石城ヒの義弟の義俊君ヒ話ス。

外務書記官 稲垣太郎 ヲ病ヲ重ミ中ノ為ニ公務ヲ離レ昭和十九年八月十日 外務書記官 上村伸一 ヲ代理ニ任ス

十一日　文安、李朝実録始まる、書体は青丘永言の如く「蒙古辞典」
写す、けだし南朝鮮、佐世保、八幡、山陰に部隊来る。
十二日　文安、和田氏を訪ふ「矯人考」を借る、「八旗通譜」なり。㊐丸三氏、お蔭をし田。
十三日（日）㊐の清水さん家の調査。服部さん「二ーヘルツ」、レコイレート校正。6。
松井君来訪、驟雨、浅井君を連れ、けさは終日みるど、夜「粤漢保南下」
寸軍書をしも成らず。
十四日　文安行の途中、新気のプラットホームにて三島秀雄君に会ひ、車へゆく途中
とも通り、和田氏宅はどんてん満洲へて。池田にて下なし研究所へ
寄り、一一。。文安へゆけば浅井君あり、浅井氏に合はず。一七。。帰宅、
夜「粤漢保南下」終る、半ば二十五枚。けさ塚山勇三君より㊐、即日帰
即らし。
十五日　文安へゆく、疲れたり、一五。。華中鉄道へゆきしが空襲ありなるず、㊐略君より近日来る
と。
十六日　文安、李朝実録、八旗満洲氏族通譜終る、定朝に終る、良ひ出ず和田氏を見え
帰途同車、新り方へ寄りまるが附録「明治大帝」買ふ。夜大臣國司君来り
小宴。
十七日　㊐に浅井氏。昨日新氏へ財布忘れしらしく不快にて浅井を訪ねず。かがんち氏に依
宅残れること発表。夜新氏へ出しに果して財布なし、丸宅へ帰る、寄遠
いあると。
十八日　㊐の高橋二郎、石田正寛。一二。。薄井の工場へゆんとせしに会行のため高山を経
え、ちょうど、弱江の間を歩くを一時間半、帰る。
十九日　㊐の佐藤、服部正広、小高橋二郎、薄井、田村の、筒井静へ。この頃食欲旺盛。
仕事せず。かがんかんに残る部隊ありと発表。
二十日（日）朝日より勤労奉仕すみ、疲れたり。なお中部に空襲ありしらし。
二十一日　昨日の空襲は関内方面、けさ一〇。。また空襲と。数防団員のそんて呼出しあり。
夜　略　異君来る。
二十二日　薄井より㊐、小田急の東側なりし。二十七日三時ごろ行くとハガキ書く、夜数防団

を引受く。

二十三日　夕方森のぢいさんと二人で「こべりや年代記」借る、一一、二五。井澤氏への発信。

二十四日　㊐羽田、女子供に出来ることをやると工夫するのを戒める。大。橋野節氏より新潟のための太刀合までに「百姓人の心」十五枚。羽田と橋野氏㊐、けの豚肉しばし。

二十五日　一一、〇〇　甘利進君来訪　書倉後吉野弓亮を訪ねんがための世話、上野を出る

迫り、奥さん今ではなしに旅行中と、二一、〇〇甘利君泊る。

二十六日　一一、〇〇　甘利君去る。長話して疲る。そう言って聞くに時局感ずまい驚く。善悪を知るべきの秋なり。㊐筒井母、新隊名未だ分らずと、大垣国司君。けの豚肉

二十七日　(日)㊐服部氏、石田君。一三、〇〇家を出、氏君と湘南電鉄沿線に井を訪ね断りて、十字路不戸を訪ねし君多。けた思。〇〇家定教の演習、新郎仮と。こりて夕方より松を見る海の行へ逃れんと共に武蔵、一八、三〇まで切留愛子すると、請ぜて帰り、教室にいかで世画鉛に入り一〇分エーケレ見て二〇、〇〇帰宅、暑氏に一書政、奴跳平と出書。

二十八日　日田村の母さん、長崎牛なんぞと。九、〇〇まで「日本語」十月号の子稿書く。長崎と田村へ㊐。けて陣組のオピ博士出征。残るは子。

二十九日　朝より書すもまつかいして「女子満洲旅に於ける殉死の風習」三十五枚書く。のうみとろり、夕方森の君を訪ね、傳令掛で、六三冊受り、四年の史で二冊と

㊐書庫にしらべて帰る。松井君し来合せ話せし夕。

三十日　㊐なし、無為、昨夜寝つき遅く、昼一一、〇〇まで寝たり。「殉死」送る。

三十一日　誕生日、義餅焼く。㊐ふ洗ひ田茂夫、輝夫菊池で、羽田書店、大垣国司。女子暢気なるを。淋く紙つく。

九月一日　㊐甘利君、話人は婚記的と。修人の勝つことを望む。けの女洋女辞典の子稿書きて了る。「門鈴、伊藤門、ウデヘ、エヴェレキ、オロオロ」十一枚より。菊池で、羽田書庫。家へ通信。

二日　㊐村田幸三郎、村山宮の中隊長をする隊と、ちつみしく雨ふる通信。氏族の

民俗」原稿受取り。富山房へ原稿送る。他に事なし。

三日(日) 朝の第一信、到はして由、午前中松井君来る。書籍の整理をなして夕方まで掛る。

四日(月) 朝日書店より同、夜分宮崎氏の来訪、皆より悲観的なる由。書籍の整理

すみ、夜代の住家探人十三名書く。

五日。 朝日新三郎より同、船橋を出なさしと。朝日氏に会はず。午後帰りをうず。

六日 同上甚世紀社より、津村氏もの設立册子作るとの件。一日悲観す。夕春氏へセールニ行ちゃく、長女球南と。

七日 二、〇。西研へゆく。河原、石田二君と話し、書籍後手場石来る。二君に後職紹介す。「民族の特性の特殊性」。〇。昼より「スコトラ民族下」小倉氏宅「朝鮮語のため」「哈爾太文学論叢2」買ふ。文学へゆき、和田氏会いし後職お願ひす。什ち電話してみんと。汪精衛死せしらし。代会始め、中央首相東郷氏の談を出す。帰れば平野義太郎氏「民族政治の基礎問題」、日本文二「世界歴史」出でありし。日刊講演を書けと仏陀誠氏の姉君より。

八日 雨。田ゴし、来ゴし。田中氏を二人紹介。夜大正口司君来り仏教居士「無無居士」「明治三名作集」買る。文庫「ルバイヤット」と「珊瑚島」買ふ。羽田書店より連絡来国来ると。

九日 田橋峰郎氏より書籍受取「まちの」よみしと。一三、〇。文庫へゆく途中和田氏とお会ひす。銀田と喧嘩せずせと。島氏を客いぬられる由、山文堂と帰る。妻君私に帰りしと。幼児仏力発達にうみ仏を尤大き。後と。

十日(日) 服部氏雄来る由、けのおるし。夜山文保来る。又情の信念なり。

十一日 休夜眠れず。書一すむ。安山氏を訪ねビールの空瓶とり来る。雨。夜。雨来る。田平野氏へ礼状、仏陀静氏へ問合せ。

十二日 田大来、十五人から節分祭とと。雨。休日より女学満洲旅のエクボがミーの改新

巻ゆ、午の命令ですみ。

十三日 田利住田来る、丸石氏まで帰りしと会ひしと。鳥取へ移住と。午後、紫雲へゆき(ゆきてるる文)

博「女五大倫叢書」買ふ、つまらず、丸石氏へゆき帰る。ゆきて風邪、

十四日 田朝松井君来訪、羽田書店の丹波氏来訪、十六日書三如氏と相談せしと。

十五日　昨夜義男帰りたり。けさ来り話す。午前日ヶ谷へ弘安、安田松井二氏を訪ね帰る。夜、妻と義男の之合を、大体良きらし。㊐本山健平「和気清麻呂」。

十六日　生田氏より承諾の返事。一二〇。羽田書店へ行き、三好達治氏へ会い、書食後、飲文社へ行く。阿部知二来合せ上海へ行く由。雨降りつゝ帰る。明日発ると。世知辛き日。明日来る。

十七日　午後世知辛し、塩坂保成君を同伴し来る。南京へ行く由。村上君と訪ねるつもり「酷厳物」帰る。義男結婚すべし協也。二十六日挙式の予定と。

十八日　㊐大塩君より、大塩精平君ハ九州にて健在と。一二〇。飲文社の岩野君来り、表紙の図案同君友人の幼女の絵とと、三十部刷る。紙は極上質と。書食後去川氏を訪ねん二ケ年間の徴用と、「明治の伝説」上巻を貸す。松井保治君と帰宅。

十九日　㊐満洲の弟村一氏より、一四〇。軍戒厳令、一七、三。解除。夜防空演習。

二十日　寒し。この頃無為。

二十一日　㊐大塩工場へ行くこと。書二通、瓦斯会社より一孔宛、百姓、今日安堵の様なり。

徳と寸とをとられること。文芸春秋より速達。義男郎の話と。

二十二日　㊐大塩図司、英米帰る衛「まるとり」着きしと、赤川君へ立微の接拶にゆく。

夜、義男の婦一家（同日の氏紀氏）と会食。

二十三日　私妻を電送、昨日氏島大学教授となること。㊐父より云われることとて。世知辛し。

この間臨時君とともにしと、一五〇。後世君来り、後職せよ、白鳥先生、鎌田君等の

衛彩の紙は平塚君にもらひたきやる。東宮近くまで送る。不世出なる寒し。

二十四日　㊐事をし、羽田書店と㊐、二十七、女学生をよこせとやる。

二十五日　研究所へ行くと、駅まで出て全入きたりと新明帰る。夜義男に従三十円、けさ羽田書店

「和歌三つ物書ぶり」送る。

二十六日　義男結婚式、一四〇。ラジオ。羽田書店大塩図にて、一七〇。また、義男の友山金君と

酒しつゝ帰る。高子、ワイシャツ買る。十円。

二十七日　㊐荒井平氏印刷。一〇、三〇。羽田書店の門部女来り、話を交す。一五〇。安澤氏と接話

会いやと同義君の話聞く。つまらぬ。三浦と帰る。けあ伝口、三上二君より お伝 如何

の問を受ける。松井[illegible]閉口せしむ。ひるまた満洲鞍山会議。

二十八日　門脇女史来る。研究所（ゆき石田君と白鳥（ゆく）、医学部の君に会ひたり、後
　　戦後報して帰る。
二十九日　阿部女史来り、松井保治君来り、退戦せしと、一回、三。研究所（ゆきしし
　　はくして（昭和26年）長来、前日直要も来る。夜同窓会の夜会に招かる。
三十日　三日間休眠。㊐来る。午後文学（ゆき虚脱寝略をみつ、和田氏をお待ち
　　し、一六、三。後戦の了と同時に今後のそ申とく。報ゆは先そまり。
　　大宮　テニヤとの食談発表、大会の挨拶官はわ如英良中語と、スマトラにて世話とな
　　りし信長氏に会ふ。

十月一日（日）㊐英師来る。三通。書一通、奈川氏を訪ねしに外出許なしと。夜建来る。
二日　九、三。出勤、鎌田君来り、返還戦死確定と、大宮函館局の一人なり。門脇女史来
　　りて近君なりの戦死報知。
三日　九時出勤、吉瀬浦勝定をよみし。㊐九去人、丸は名古屋にて止まりしらし、宮川氏より
　　七八、〇。中又（一ケ月はいゆくと。
四日　九、三。出勤、雨、五代津文館見る。夜松井君来り今見保治君三月末、ニューギニヤ
　　にて戦死の報告と、映画配給社の戦争の保証人となる。
五日　雨、一〇、〇〇出勤、無為。新潮社より四四、〇（一六、〇）来る。連盟にて「外語」の
　　催促。
六日　出勤前松井君来り、昨日書印紙の印あれ。出勤せしに一日他せし。帰れば大
　　垣君より大垣離去印君。戦死の公報なりしと。孤児にて不遇、函学生
　　として才なしと書のみ。無とるるを二度、うバかりにて敵場に死せしと覚ゆ。
七日　家雨一日、後苦吟せし「哲之」を退勤後之苦考れ、れいしゆく、不快。
八日（日）母、あるい来る。大陸先生のあれと知らせるなり。父より電報。建、方壁
　　移の予約七枝入ると。三部入りあり来と。夜、客外にも出正家石来り、
　　戦争近年の材料なしと。
九日　一〇、〇〇出勤、一、三。大学（ゆき山下達郎氏より明学部浦浜勝定より退部とまり
　　意。海の宝い古思堂叢書あるを見る。子供のため三冊買って帰る。文学」研出書
　　房に移り、十月五、まで一ヶ月と。

十日 ㊐ 丸と「文芸」。6号をもらひ来られ、そのことをられしき。

十一日 出勤、淡せ君来る。帰途「朝鮮語方言の研究下」と「マテオリッチ」買ふ。ゆうべはい四

る様来りしと。

十二日 午後家族文化研究所（中之島図書館）の「南方図説」を見る。服部宇之吉博士の娘を

見る。什の七曜日より十五日まで台湾へ大空襲（百科辞典）と。

十三日 淡せ君と帰る。高田君にて「樺太アイヌ双話」（十三日まで）買ふ。「新潮」十月号来る。

十四日 風邪気味なるも文学研究「一」来る。「女流文学研究」買ふ。

十五日(日) 風邪なるも風邪を押して出勤、瀧沢勝蔵はじめ。早退。空母十隻撃沈と。

十七日 当番なるも風邪を押して出勤、瀧沢勝蔵はじめ。早退。空母十隻撃沈と。

十七日 神嘗祭。㊐中郷清之夫人、出野九月末南方へ行きしらし。数号送別会と

て夕食に二旅舎会。台湾方戦闘継続す。

十八日 昨夜眠り足らず、朝散歩、まち伸ばすことアリ。日課やりしまんてなるし。帰途 玉井是

博「文部社会経済史研究」購ふ。風邪ゆゑ宜し。防部女史に明後日来よと電話す。

十九日 昨日、竹内と共にまち日つもしと。大垣わい状の如し。「書香」来る。今西春秋休み。

十九日 雨、防空訓とうとうして在家、㊐父、小山正孝氏。防空訓とり止め、雨ひどし。出勤。夜台

湾沖航空戦の総合戦果発表、戦艦三隻。を失ふ、航母十九（巡十二）、戦艦

二隻沈め。米軍レイテ湾に攻撃開始。英印軍マヨル処より。なほ方面より

二十日 ○○出勤、玉井と大山周明「回教政策」と研究所にゆく。防部女史来る。㊐本、筋痛

併発と。山内迪彦、三好達治。スマトラ、カーニコバルにて航母一撃沈と。

二十日 数号出発朝三津へ出発。帰途、田白にて高砂旗洞主報告。一冊買ふ。七。

㊐父より。日本語の発達の研究。生日祝語をもの発達の研究。

二十日 月曜日 教育警防団副部長に任ぜらる。

二十二日(日) 朝松井来る。防空研究所陽光をたのまる。午後和田氏を訪れ、中学校を訪ねし

もはや、丸島寺宅にて南方は脳溢血なり。南川は寺宅にては未だ帰京せず。海軍中

千葉来りしと。

二十三日 書きもらせし出勤せしも頭痛して中引、まま外南に変ぶらやく、帰宅、帰途 安垂

人文学報二ー二冊よ。終日まりて話しゆく。日布利一去る。
二十日 防空演習あり。警防団の呼出あるも、一日臥床の結果。日富山房より一、六〇。
二十三日 出勤、渡瀬君来る。日大寒。
二十二日 出勤、将棋をなすとして二回勝つ。此島に海戦しまり也。江南幸子より姫の弟一郎出征入学のことに付合せ来る。可喜。
二十七日 雨、日本書院二冊、青木陽生三敵を止の写真会社にかりし。夕方此岳沖海空戦の綜合戦果発表。
二十八日 帰宅、ひ写よ。「支亜民族の果」「ひ大文学研究年報5」「甘粛西蔵の辺疆地帯の民族」「西洋文化の支那侵略史」「ひい諸学研究報告17」。けふ文学の教員会あり。南の話は極寒にて十二月ひ一番寒と、承知と答ふ。（十日ハ寒ひ）。
二十九日（日）日九三円。防空学校。レーテ島に海戦ひく。夜大亜細亜日記来る。金弼十銭をる。
三十日 雨、教員の宣誓式穿きてゆく。二十四円伝の会に（十九日）帰宅。
三十一日 国民学校出、防空学校。在留邦人の状況申告書、江南幸子。

十一月一日 防空学校まりてする。一二、三〇。出所、一三、〇〇。空襲警報にて池袋駅にかけば有毒止りる。実行と言はるれば解除、帰りて警防団の初めを警防手帖もらふ。国服もらひまる。空襲警報の時出ること。けふB29一群流来せしと。日哈爾濱南南博物館写真作成すべきこと、大阪予住民役所を了後に申告。写真送。
二日 防空服装にて出勤、一〇、〇〇警報解除、一五、〇〇退出。入浴、半月ぶりなり。
三日 明治節、雨、日父、立教連の手紙送り返し来る。
四日 出勤、海風館「ひ印南洋を通ず」の校閲よ。けちやく（ちゃく）、安田君に[illegible]

東京新聞 二十六日

スマトラでのこと、劇画の間諜説 書き割で部隊もあらう筈がない。
ヒアメリカ風なのを笑してあるので 漫画は決して悪くはないからとは云へ
漫画は悪なるべし、これは我々と同 ようが、一人の大観人、一人の大観
民族のハワイ人の歌です、といはれ 家を出ない国は世界歴史にも珍らし
て引下る。ジャズも黒人の音楽であ しい。今後も恐らく歴史の国にはな
つたがアメリカ産本が世界中に広めたのである。言葉はかりでなく、黒人が、無風流民族であることには間違ひがない。

敵に詩心なし

田中克己

もとより作戦の余暇に歌を作る間 我国も時局
余裕者もなく、辞世を遺して戦立つ 下、印
若輩もたい。忙しい業務の余暇、句 刷はむつかしくなり、絵画個作、書
の論々壮んならんことを期待する。 読書にもいろ〳〵と困難は伴ふこ
と思ふ。しかしアメリカ人の持た
ない詩心だけは失へといつても失は
れるものでなかろう。歌と共に詩心
を忘れないことを期待する。

通勤とすると。㊐北支講習所より体験許す。文芸は「すすうを逸る」、文芸春秋
委員に「私は余すなし」を書く。
三日(日)九、五、生産報国懇談会、防諜団体初めゆく、一二、〇解除、㊐相馬愛蔵、「盟和評論」
と十ちまでいと。
六日 書書とて九、三、出勤、一〇、〇警戒警報、味方機、誤報のためと。地亜子報着
したもの地図配へ中にて研究所に行くことを報ず。㊐父写。㊐伊四へ
七日 地図のお屋にて乙はりをもし英文誤訳を写いかせし愛切れ、書前に亜子報る
所着、四部書る。午すぎ空襲警報、一五、〇すぎ帰宅、二機低空に来ることれ
いて四回警報とり。
八日 清水帰る、電話し地亜子報とりに来て貰う。夜両陛下出ず。㊐末吉、文芸より
受取。スターリンの演説、ロをを挑戦国と。
九日 九、三、和田文化に学報しちゆく、作品示、一四、三、左津(平)根会(ロをし平部を根
行中と。㊐創文社より印紙三〇〇、上海にはあまり日ものと。文学部より新党
「満鮮地理研究報告」なりうんとよと。
十日 創文社へ印紙ちゆき、手紙ちゆき(二十部)他に五。部数へと。山をいたを「樺太ハ
の生活」写い、研究所、山をより学報写に来る。㊐大、写真協会、「写真ちゆ
り月号の会の案内。
十一日 帰宅前に来り、夜の案内をし「西洋文化の支那への影響」をせし、丸見
にて「聊斎志異」読む。夜なりまりピルのむ。(洪、三〇〇、一万部、日本近
十二日(日)洪氏を方、青磁の鎮四に来り、中まり也路をのをとの、再
を拾る。「民研方式」布和一夫氏より㊐、松井弘朗来りし会はず。注北銘
の表発表。
十三日 書書九、〇出勤、一五、〇白鳥所長来、一五、三〇より二十四大、一七、〇すぎ終り
部女史を訪ね、三好亜治への伝言をつし。今迄の遅れし理をし、大家迄のを送り
て出すと。㊐建ち。
十四日 帝大へ学生書海に学報与へ、満鮮「史地」16を事部宛で送り、研究室へ
りて研究所へゆく、午後満洲情報十ものみれば三村、泉の二名来る。三村君

明治の初年、知事の人、博学の士、川久保氏、中村氏、用
学、弱冠、藩主に謁、二部入用（一部六の銭と）。ほ学教ひ山上ひ中君「まち中の
の伊藤。
十三日 田邊へ。石田、手塚、我の三人の外出所。
郵便局へ学報発送いやはあり。
夕方、「清口の文
「輝要」池袋にて買ひ、阿佐谷へ向ひ
「桂の芸術」買ひ。ほ研究所「満
夢松本図書」を引取らせ。
「南」一〇〇。「日本語」二八〇。（親
芝」を受取る、感服せし小林治、ひるの村山吉の二
ますハ中。小林は中ほ、村山陽、村田次郎ち
り。
十二日 田盟邸用を会ず、至誠につ引き直しと。雨の中
を学報発送いやく。「侵方域学」買ひ。
十七日 昨日今日淀世石来所、満洲の布教一ヒ
送る。青大中を渡君への送引ものみ、
て文学を「下学学」買ひ。青木の帰途、
住所聞く。田は引語の至誠神ま。
十六日 雨、埼玉、新刊「外来語」、金城「那覇方言」「外蒙古図」「宇宙世界地図」買ひ。田
吉、帰、ほを二冊くれと。四〇〇ほ入。書店多数立ち
り。二〇三〇時ち。
十九日（日）午後 松井保治君来る、阿佐谷へ
夜 銭湯（やく
二十日 晴、青書、午後 芝合五時へ学報発送いやく。二十四人の会、一七〇〇ほ
この二日間。
二十一日 雨、田なし、三〇〇ほ勘定、購読者へ合せしのみ。

保護料税 ○○×0.8×0.15

二十二日 田前田辺典子、満和婦典ノ伝ラシと。一四、〇〇 回教隊ヘ召集ルラルモ宮城好母ハ
と話す。夜橋勝之助富工場へゆくと。
二十三日 新嘗祭、二ノ〇大江君ヒンセラレテ来る。一一、三〇 九七人集リ九ノ様ヲ話す。一四、〇
大江君と教室ヘ出て話す。
二十四日 当番出勤一一、〇〇 白石君ヒコンライト、横田ヒ女ノ来訪、ソレヨリ警報、コレ
ライトノ横印ハ敵機来襲、一五、〇〇 解除、警防団ヲ部ハ中ヒ、無人、神
宮校ヲ他ハ被弾、地鳴リセシ由。二百七十機来シと。田大
二十五日 一一、〇〇 ヒマハ警報、帰宅セシ事ヲシ、田羽ノ子。安川ハハ中ヒ夜ハ
セリヌ「ラ」ノ「談航記」ヲ「那ヲ報告」場度成「母南ヒ」当ヲ。
二十六日(日) 九、三〇 砲ヒ君来訪、煙草三箱ヒ。ヒ十点逆ヒ印度ヒ出セシと。一三、〇〇 警報、一
機来シと。支那語ノ記旅ノ終ル。
二十七日 当番出勤、校務ヒ、ヒ二ハセシ、一三、〇〇 空襲、一五、三〇 解除、白田君ヒ共ニ
碗ヒ牛ヒ切リ不快
二十八日 久シ振ニテ警報ヒシ。一四、三〇 前田辺典ノ家ヘ行ク。ト満和婦典モ来ヒ。
未ヒ遊ケシ家ヒ、言ハル部ヒ。ヒ回航一聖ハ冊ヒ。一六、〇〇 田ヒヒ
場ノ太平ヒ。
二十九日 地図ヒ加藤ヒ「絶対ノ出撃」「ヒイル」「ヒ那史」ヒ。蒼徐紅ヒ「神軍」
方部ヒ空襲ノ防ヒ出セと、断ル。田ヒ、三村、阿部ヒ。
三十日 昨夜一一、三〇 警報、警防団ヒ部ハ駆ケ出シ無ヒ、雨降リ寒シ。神
田(錦町ヒ土代町)ヒ焼茅場町方面ハ火災。三、〇〇 解除、帰宅シ
四、〇〇 ヒ未襲。五、〇〇 解除、一〇、〇〇 ヒまで寝、一三、〇〇 ヒ所セシ手紙、ハ原
二君ノミ。田敵機番号ヒ無シ。

十二月一日 雨、一〇、〇〇 出勤、所長明日来ラルヒ、石田君ノ家ノ三ヒ未ヒ焼ヒシ由。
焼夷弾ハ浦辺ノ行ラシと。田警防団ヒ明後日ノ日曜ノ状。
二日 一〇、〇〇 出勤、ヒハ日島ヒ欠ヒ、娘婿ノ疎開先ヒ之ヒ行ケヒ早ヒ退出ヒ
ル。運ヒ前田勝之助君ノ出勤、南ハヒヒヒヒ、動方ヒ吉ヒ、ヒヒヒヒ。帰ヒ
四郎、平野敬之助ヒ来ヒ。一三、〇〇 神田ハヒ青ヒ紅ハヒ中ヒ話ヒ

は次第に近頃と、企劃倒すの吹能と。神宮」は才一期に決定をとと。他い
保田「ゆ不満録」三枚送る。「花筵」皆ある、不快。内山いやを女五人文子私一四
見はけてうれし。他い並山外お、全部仕一「大東亜の構想」皆を望よ。姉妹子、明
後日疎開と。㊐文芸春秋十二月号の三〇〇。

三日(日)㊐父子、今井清一、十月廿六日以降、満方面で戦死と。海見なり。中野宅
美氏、長浜班員、各見君。一二、三〇警防団員集いて中せしい「なぜ」と、芸曹
(後世)して帰る。岐阜駅へ疎開の荷ども既送置ひる中、一三、三〇警
報発令、分団いやを書記のをやる、区域内に死者八名。夜、陸組常会。
四日 四三〇頃より起床、陸軍の疎開を見送る。書籍して出勤せんとし財布の失く
なりしに気付く、現金六〇〇の外、研究所の鍵と印鑑と失う、行きしに石田君
来られて知る、一二〇〇退出、分団いやを探せしも見付からず。大路切の家
面倒見印せ付かしし生徒して帰宅、陸軍(岐阜)の定家より来し
銀杏食る。此日二十一機数来襲と。中かえしは低空なりなり。
五日 一二〇〇出勤、前田晴太郎と話す。帰途赤川君を見舞う、一時半三菱方面に埋
を見し取るなり。
六日㊐大塚一国司令。中野清吉夫人と服部正班、堀口子(大東)へ。一二〇〇出勤をせしも
自分駅で車後、警報発令に帰宅、一機みとて空襲警報とはならざりし。
七日㊐午前、柏井母、「満洲」より。一〇、三〇出勤、一四、三〇退出、日曜にて「満洲雷鳴」
を。まいて望よ、此頃一〇日のなり。一七、三〇警報、一二機来らしと。
八日 二〇〇警報に出勤す。此頃地区に来らしと。四〇〇帰宅、九、三〇出勤の途、日曜にて
「朝鮮語を」「改よ改」望よ。一二、〇〇警戒警報、帰宅せしまもし、明
後日を見舞、帰途、那珂「洋妖」二〇〇にて望よ。此の此頃は駅近
い秘密なり、家族を知不通と。
九日 三〇出勤の途警戒警報となりしも一時引返せし、一機みとて再出。日曜にて
「文芸」「満洲」。〇〇過ぎと(今朝三〇警戒警報に一時起床せり)。
十日(日)朝、柏井君来る、㊐父、田中成子。午後各見君、ノートのとタバコ。そる、
勤務十五にいてすれと。 赤川留子宅を訪問、帰れば 高田留にて此夜即

「戦争地図」「南方及民の戦時」買う。二〇〇。南機来報、イ軍撤退。

十一日 朝出勤出勤前に南氏に会いに行くつもりで会う。一五〇〇より二十四史の講合せ。今後は一三〇〇とする。和田氏と話しながら帰る。夜大江君来たれる。一〇〇。

電報なき報、出ず。

十二日 五〇〇。ボン電報到来し由、一家眠りを起す。甲丸夫人、山内氏、春子、政、文吉より年賀状、一二〇〇出勤、一三〇〇より「世界満洲誌の研究」を話し、後りて南田の歓迎会。大江と共に葡萄酒を飲む。夜七三〇、一〇〇〇二回空襲。

十三日 四三〇来報、昨夜来、雪降る。一一〇〇出勤、一三〇〇電報い帰る。三度方面より。南機の一機煙吐くを中断して見し。

十四日 四三〇電報、甲砲局へ。一三〇〇山内氏より電話、兄秀三はれせしと。近日会う約束、青梅社中を企画局(中央中央連絡)を設し、創立社(中央)を新しい世界を歩き、帰国すと。代理とする中山崩せしを組立し、二十日終出来と。甲江に三三、大分へ移住と。

十五日 五三〇。電報到来。東部へ投弾と。防空防図にて隣家防空壕。九三〇まで寝。一三、出勤。この頃三合位昭和を字す。

十六日 昨夜は久し振りにて空襲なし。昨日復せし家屋増せり文にて安心。帰途阿佐谷の風呂屋に昨日忘れし私下駄「南方を見てくれ」なし。甲村田工事主事。

十七日 甲俊紀より(母より)。春子より大江にある由。一〇三〇山内氏来る。十三時報告。上海次第会社にある由。書会し話せしのち女子会社を訪ね。帰途阿佐谷に寄る。

十八日 五三〇大江図司君来る。十五時ラジオ聞く上陸と。

十九日 書いて出勤、一二〇〇電報。帰りし名古屋、防神方面と。赤い、阿佐谷を訪ね保宅、甲大江の母より。内容前任に同じ。昨日名古屋所長、宅を訪ねしと命令せしと。二三〇〇電報到来。

二十日 一一〇〇出勤、無事。俸給渡す。

二十一日 〇〇。南機来報、一一〇〇出勤、まもなく電報、白鳥所長来る、昼食一〇〇〇、田大江より。

二十二日 出勤、松下氏来、地図の事につき話す。その前学院にて所長会合。学内工場をみる。べんりなる「たらちゃいの方紹介」松下氏来「南方見てくれ」。新村より「世界経済考」本年度版会社二冊目の仕事を買う。夜二回来襲、四二〇〇。

二十三日 出勤。

二十二日。○。登之助、一〇。〇出勤、二。〇。登之助、名古屋に行く様来る。帰途、「ハルビン」「おしま南方の様子」「ストライキ」聞く。

二十三日。○。登之助、一〇。〇出勤、休暇をとり国元へ。神田山中を通り「支那秘説」「支那の家族制」千田万三「満州文化史上編」吉川幸次郎「支那人の古典とそのよみ方」買う。和田久佐君、丸善に行く。帰途、森山氏に会う。帰宅、森山氏、明日来る由。二一。〇。敵一機来、国防婦人会来、支度部、山田迪孝。

二十四日。(日)三。一五。〇。敵三機来、書、阿佐谷へ行き、国防婦人連盟、お幸仏様に海苔、塩鮭、つゆ「スストラ紀行」買う。松井伊治君来、映画、和倉氏へ動物園係と。夜、森山氏来り、会合廿一時。〇。〇、ハルビンより来ゆく。

二十五(大正天皇祭)三一五。〇。敵二機来、この頃空襲警報、敵ときどき防空壕に出動す。炬燵で待機也。書(南事)なし。

二十六日。書、出勤、石田、平塚、松沢三氏出、国大、「南の星」一冊来る。夜「日民文化」の原稿に追われ。昨日今日、我機のサイパン攻撃の為ならん敵襲なし。

二十七日。当番出勤、石田君病気で一人なりし故、空襲、五十機来る、平塚氏と四人成せし事なし。夜二一。〇。大森機来るとて町会にゆきたるなし。阿佐谷にて「中央公論」「日本の女性」「大東亜の教育」「日本の話」「大東亜の歴史」「満州の話」買う。

二十八日。石田君の代りに出勤、後日来音、松山氏、六日の勝利の話。

(空襲警報、全中)

(夢会話)「大東亜新地図」「ガリ版」買う。

(「元旦敵の計画」)

さてなまぬるい南に「年頭の所感」届く、一

我来りしを味方機撃墜のための大騒ぎなり。国民徴兵、登和田君会う。一日

二十九日。昨日の作へ、歳暮ものがたり、研究所へゆき手塚氏と話し、帰途、国白山で新投稿考「国家印象」買う。この研究所より三合仮免、英馬字典と借出す。

三一。〇。二機来て四〇機、町会に出動す。

三十日。一。〇。五。〇。二回、敵機来りしが出動せず。家中みな風邪ひき、国父子、午後散髪、三合仮免。

(三十一日(日))今朝、久し振りに敵襲なきまいなし。国山田迪孝。一。〇。〇来り居来る。三合仮免にすむ。国田辺紀一家、明朝、北東へ発すと暇乞に来る。三一、三。一機来。